

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## Muslims in a Non Islamic Environment : A Case Study of Egyptian Community in Vancouver, Canada

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 片倉, もとこ メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00004293">https://doi.org/10.15021/00004293</a>

## 異文化環境のアラブムスリム

—ヴァンクーヴァーのエジプト人ムスリムの事例研究—

片 倉 も と こ\*

Muslims in a Non-Islamic Environment

—A Case Study of Egyptian Community in Vancouver, Canada—

Motoko KATAKURA

The present paper is based on my field research, carried out from June to September 1984, and June 1985 to February 1986. I have already published reports on Arabs and Muslims in Canada, the actualities of whom are yet little known and who, I observe, suffer more often than not from the prejudice against them [KATAKURA 1986: 206–215, 1988a: 681–726].

In this paper, I intend to focus on Egyptian Muslims in Vancouver, describing and analysing the process and the characteristics of their adaptation to a non-Islamic environment. The materials were collected through personal interviews and observations of 50 household members living in Vancouver.

After introductory chapters on outline of the fieldwork (Chapter 1) and on the social and historical background of immigrants of Egyptian Muslims, presenting data on the socio-demographic features of 50 households (Chapter 2), the pattern of their social networks are discussed in Chapter 3. I examine 1) the social relationships based on Egyptians' encounters with other Egyptians, non-Egyptian Arabs, other Muslims from Africa, Europe, Asia etc., Canadians of French or British origin, and Jews in Vancouver; and 2) the blood-related network in Canada, Egypt, the USA, and other Arab countries.

In Chapter 4 I examine whether the Egyptian Muslims in Vancouver change or not their traditional behavioral patterns or values in everyday life. For this analysis, three aspects of their life are used: 1) language and education; 2) life habits such as food, drinking, marriage and funerals; and 3) religious consciousness

\* 国立民族学博物館第2研究部

and practices revealed in fasting, praying, alms giving and attitudes towards Christmas celebrations in Canada.

Through the observation and the analysis above, we can summarize the result of this research as follows:

In terms of the way of adaptation to non-Islamic society, Egyptian muslims are categorized into three groups, 1) secular assimilativists, who intend to identify themselves as Canadians, by adapting Western values and behavior. 2) cultural nationalists, who cherish Egyptian culture, including Islam as a part of Egyptian culture; and 3) Islamic transnationalists who identify themselves as Muslims, neither as Egyptians, nor as Canadians.

The approximate ratio of the present population of each group is 25%, 45% and 30%, respectively. However, the number of Islamic transnationalists is increasing these years, because fairly good numbers of secular assimilativists and cultural nationalists tend to shift to the Islamic transnationalist group.

Thus there is a trend of further Islamization of Egyptian muslims in Vancouver because of their becoming more conscious of being muslims in non-Islamic environment and because of world-wide Islamization which is presently prevailing in and out of Canada.

はじめに	3) アラブ人以外のムスリムとの関係
I. 調査の概要	4) 英仏系カナダ人との関係
1. 調査対象の選定	5) ユダヤ人との関係
2. 調査期間と調査方法	2. エジプトおよび他の地に在住する親族との関係
II. 調査世帯に関する基礎資料	IV. 生活様式の変化と不変化
1. エジプト人ムスリムの居住地とイスラーム的施設	1. 言語と教育
2. 世帯規模と年齢構成	1) アラビア語教育
3. 就業状態	2) 家庭教育
4. 世帯主と配偶者のエジプトにおける出生地	3) イスラーム学校
5. カナダ移住年次と滞在年数, 移住の動機	2. 生活習慣
III. 社会的ネットワーク	1) 食習慣
1. ヴァンクーヴァーにおける地縁関係	2) 飲習慣
1) エジプト人との関係	3) 結婚
2) エジプト人以外のアラブとの関係	4) 葬儀
	V. 価値観の変化と不変化
	1. イスラーム的行動および意識

1) 断食	2) Rashad 事件
2) 礼拝	3) イスラーム関係刊行物
3) 巡礼	4) riba'-利子・抵当の問題
4) 喜捨	5) イスラーム化現象
5) クリスマスへの対応	むすび
2. イスラームへの関心	1. エジプト人ムスリムの3類型
1) コーラン勉強会	2. イスラーム的生活様式の強化

## はじめに

この報告は、カナダ西部、ブリティッシュ・コロンビア州ヴァンクーヴァーのエジプト人ムスリムを調査対象として、非イスラーム的環境における適応の問題について考察し、彼らのイスラーム的生活様式からくる価値観がどのように変化しているのか、あるいは変化していないのかを分析するものである。

筆者はすでに、カナダにおけるアラブムスリムの移民の歴史をカナダの移民対策との関連でとらえ、西欧社会一般と同様、カナダ社会においても顕著にみられるアラブあるいはムスリムに対する偏見と無知、それにムスリムはどのように対応しているか、イスラーム的生活環境をどう作りあげているか、新世代の動向はどのようなものであるかについて報告した[片倉 1986: 206-215, 1988a: 681-726]。そこでは、カナダ政府が「望ましくない」「同化不可能」とした、アラブを含めた「アジア人」に対する排斥的移民対策、1962年の「点数制度」(point system) 導入による移民法の改正、移民対策の変化にともなうアラブやムスリム移民の数と質の変化について詳述した。差別と偏見が未だに存在するカナダ社会の現状を明らかにし、そうした環境に対するムスリムを、類型別に考察した。さらに、カナダ生まれの新世代が、実用言語としてのアラビア語能力は低下しても、「価値言語」[片倉 1988a: 721, 1988b: 136-137]としてのアラビア語は保持しており、今後、カナダ社会の中で、アラブとしてよりも、ムスリムとしてのアイデンティティを求めていく可能性について指摘した。

本稿では、アラブムスリム移民のうち、ヴァンクーヴァー在住のエジプト人ムスリムのコミュニティに焦点をあて、その社会的ネットワークや言語、教育、食生活、結婚や葬儀、礼拝・断食などのイスラーム的生活様式、宗教意識などの面から、より詳細な具体的事例を報告するものである。

この調査の結果、エジプト人ムスリムは、カナダの異文化環境への対応の仕方によって、①同化型(西欧主義型 As グループ)、②文化主張型(エジプト主義型 Cu グ



グループ), ③トランスナショナル型(イスラーム普遍主義型 Tr グループ)の3つの類型に分類し得ることが明らかになった。

As グループは, カナダ社会への同化要求が強く, 自分のエジプト的, ムスリムの要素を抹殺しようとする人々である。Cu グループは, カナダへの同化をも考慮しつつ, エジプト本国の文化を中心としたアラブの伝統文化を大切にす。Tr グループは, エジプト人やアラブ人としてよりも, ムスリムとしてのアイデンティティを重視する人々である。具体的に詳述していく本報告の過程で, 記述上, As, Cu, Tr グループという呼称を用いることとする。

なお, 「コミュニティ」という言葉は, 地域性と社会的・文化的同質性をそなえた共同体をさすことが多いが, ここでは, 地域社会を形成しているという空間的な意味合いではなく, 伝統を共有し, 社会的きずなを分かち合っている人々の集団を指している。被調査者の固有名詞は, すべて仮名の頭文字で表記した。

## I. 調査の概要

### 1. 調査対象の選定

調査対象にヴァンクーヴァーのエジプト人ムスリムを選んだのは, 以下の理由による。まず第一に, エジプト人移民が, カナダにおけるアラブ移民の中で, 主要な位置を占めていることである。エジプト人のカナダへの移民には曲折はあったが, 1962年の移民政策の改正により, 点数制度がとられるようになってから, エジプト人コミュニティはアラブムスリム・コミュニティのカナダにおける動向を知るうえで, 重要な存在になってきている [片倉 1988a: 702-703]。数の上でも, 現在, エジプト人は, カナダにおけるアラブ移民中, レバノン人に次ぐ割合をしめている。その大部分はケベック州, オンタリオ州に住むが, ブリティッシュ・コロンビア州のエジプト移民は, 次いで多い。ブリティッシュ・コロンビア州内のエジプト移民においては, ムスリム人口が最も多く, コプト [片倉 1988a: 702, 註28], パハーイ [片倉 1988a: 703 註29] などのエジプト人の数を, はるかに上まわっている<sup>1)</sup>。

第二に, エジプト人の移民コミュニティについての研究が, これまでほとんどなされていないことがあげられる。アラブ移民の中でも, アルジェリア, チュニジア, モロッコ, リビア系の移民は, フランス, イタリアなどヨーロッパの旧宗主国に多数が移住し, 彼らについての調査研究もおこなわれている。レバノン・シリア系の移民に

1) ムスリム家族に対してコプトは約15~20%, パハーイはごく少数。

については、商人として、アフリカ大陸はもちろん、中南米、北米大陸にも、広範囲に、深く根を下していることが、よく知られている。カナダのエジプト人コミュニティを調査することによって、レバノン・シリア系移民などに比べ、研究のすすんでいないエジプト系移民の実態を多少なりとも明らかにできると考えた。

第三に、筆者が彼らの祖国であるエジプトのムスリムたちの生活や、一般の社会事情に通じていることである。筆者は1962年から1965年にかけてのナセル時代にエジプトのカイロ大学に留学していた。現在カナダに在住しているエジプト人ムスリムには、このナセル時代に国を出たという者が多い。インフォーマントと調査者の間で、時間的にも空間的にも、「同じエジプト」を知っていることは、話を聴いたり、調査をすすめるうえで、ラポールを成立させやすかった。第四に、集中調査をするのに適したコミュニティであったこと。筆者がヴァンクーヴァーでムスリムの調査をはじめにあたって、ブリティッシュ・コロンビア大学の教授、その他多くの人々から、イスマリーイー・ムスリムを研究してはどうかという助言をうけた。たしかに、イスマリーイーの人口数は多く、組織力もあり、カナダ社会にかなりうまく適応しているといわれ、調査対象としてはおもしろいと考えられた。そこで予備調査を、多少すすめてみた。しかし、本調査にあたってはまずパリのイスマリーイー派本部の許可を得なければならない、礼拝中は部外者がモスクの中に入っはいけないなど、さまざまな制約が課せられることがわかった。調査結果を活字にすることにも問題があり、予想以上に閉鎖的な集団で、調査対象には不向きであると判断された。

それに対して、ヴァンクーヴァーのエジプト人は、開放的であり、宗教生活を含め、さまざまな生活空間への出入りも、自由にさせてくれた。たとえば、ヴァンクーヴァーには Nile Flaser Egyptian Canadian Society [片倉 1988a: 715]<sup>2)</sup> というオープンな性格をもつ組織があり、エジプト人、英仏系カナダ人のみならず、ドイツ人、ユーゴスラビア人、フィリピン人などさまざまな文化的背景をもつ人々が参加している。

こうしたエジプト人コミュニティのもつ性格から、異文化環境におけるムスリムを考察するのに適した集団であると考えられた。

## 2. 調査期間と調査方法

本調査は、1984年6月から同年9月にかけての3カ月間、および1985年6月から86

2) Nile Flaser の名称については [片倉 1988a: 715, 註42]。NFECS は、1979年に設立されたヴァンクーヴァーのエジプト系カナダ人のための親睦団体。1985年のメンバーは41家族で、ヴァンクーヴァーの、高学歴で専門職をもつ平均的エジプト人が多い。会費は年15カナダドルで、アラビア語と英語の新聞を発行しているほか、ほぼ1カ月に1度のスポーツ会、ピクニック、11月末のディナー・パーティー、12月の子ども会などの行事をおこなっている。

年2月までの9カ月間との2回にわたっておこなわれた。ムスリムのイスラーム的生活様式が顕著にあらわれるラマダーン月（断食月，1984年5月31日～6月29日，1985年5月20日～6月19日）およびズー・アルヒッジヤ月（巡礼月，1984年8月15日～9月15日，1985年8月5日～9月5日）が含まれるように調査期間を設定した。1989年7月には，その後の変化をみる追跡調査をおこなった。1回目の調査と3回目の調査は筆者1人でおこなったが，2回目は筆者の他にブリティッシュ・コロンビア大学大学院人類学科のカナダ人学生2人が助手として調査にあたった。

調査の方法としては，面接調査，参与観察，実地見学を主軸にし，新聞，雑誌を含めた文献調査も合わせておこなった。最初に接触したエジプト人ムスリムは，NF ECSのメンバーで，彼らを通じて，他のエジプト人ムスリムとも知り合いになることができた。その後，ひき続き，モスクや，NF ECSでおこなわれる行事，会合，その他に参加して，彼らの社会的な関係を観察した。また，彼らの家や，筆者の家で，生活を共にすることもした。くつろいだ状態で話をすることによって，インフォーマントの本音を引き出すことをこころみた。こうしたやり方で，これまでのカナダにおける，歴史家や社会学者による文献，質問表，および統計を主体としたアラブ移民の研究に不足していたものを引き出すことができた。

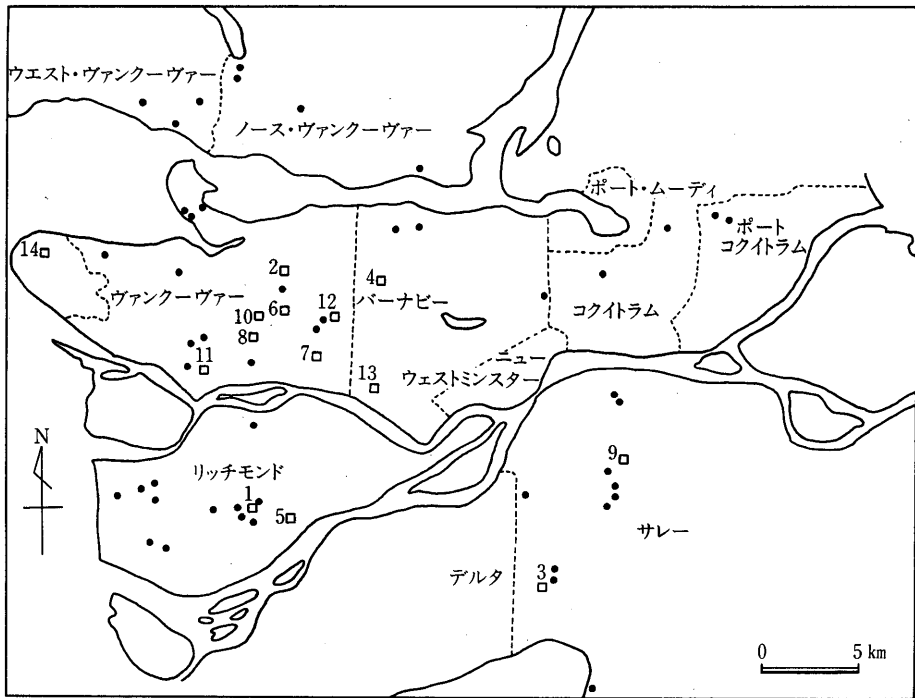
使用言語は，被調査者の最も得意な言語とした。25才以上の者は，おおむねアラビア語で，それ以下の者，とくにカナダ生まれの若い者や子どもは，英語および仏語でコミュニケーションがおこなわれた。

## Ⅱ． 調査世帯に関する基礎資料

筆者はヴァンクーヴァーにおいて，61世帯のエジプト人ムスリムに接触し，聴き取り調査や観察をおこなったが，聴きもらしなどの理由のため，そのうち50世帯のみを選んで述べることにする。その内訳は，世帯主と配偶者93人（うち独身者世帯6人，非エジプト人配偶者12人を含む。その内訳は，英仏系カナダ人3名，ドイツ人3名，スイス人1名，チェコ人2名，イタリア人1名，フィジー人1名，スコットランド人1名），子ども96人である。

### 1. エジプト人ムスリムの居住地とイスラーム的施設

この報告は，大ヴァンクーヴァー（Greater Vancouver Regional District GVRD）とよばれる行政地区を調査地域としている。図1に・印で示したのが，調査の対象となったエジプト人の居住地である。



● エジプト系カナダ人住居

- |   |   |
|---|---|
| □ 1 リッチモンド大モスク<br>BCMA本部<br>イスラーム学校         | □ 5 シーア派モスク   |
| □ 2 パキスタン・カナダ・センター<br>モスク<br>難民避難所          | □ 6 ハラル食肉店  |
| □ 3 サレーモスク<br>イスラーム学校                       | □ 7 ハラル食肉および海産物商店                                   |
| □ 4 イスマーイーリー本部<br>モスク<br>イスラーム夜間学校<br>クリニック | □ 8 ハラル食肉店  |
|   | □ 9 ハラル食肉および海産物店                                    |
|   | □ 10 イスラーム関係書籍店                                     |
|   | □ 11 オークリッジ・コミュニティ・センター<br>(大祭時礼拝所、アラビア語学校、友好スポーツ会) |
|   | □ 12 ジャックの店(中東、ギリシャ食品および雑貨店)                        |
|   | □ 13 オーシャン・ヴュー墓地(イスラーム教徒用墓地)                        |
|   | □ 14 プリティッシュ・コロンビア大学国際会館(礼拝所、子ども会)                  |

図1 大ヴァンクーヴァー (Greater Vancouver Regional District) におけるエジプト人居住地とイスラーム的施設

大モスクのあるリッチモンドに10世帯、モスクのあるサレーに10世帯、ハラル食肉店やイスラーム関係書店などが集中するヴァンクーヴァー市内に12世帯が居住している。そのほかには、ウェスト・ヴァンクーヴァー、ノース・ヴァンクーヴァー、バーナビー、コクイトラム、ポート・コクイトラムにそれぞれ2～4世帯が居住している。一番大きいモスクは、ヴァンクーヴァー空港のすぐそばにあるリッチモンド大モスク

ク<sup>3)</sup>で、ここに British Columbia Muslim Association (BCMA) [片倉 1988a: 713, 註 41] の本部と、イスラーム学校が所在する。最も古いモスクは、ヴァンクーヴァー市内にあるパキスタン・カナダ・センターである。パキスタン人が中心になって作ったモスクなので、通称パキスタン・センターとよばれているが、今では、非パキスタン人のムスリムの出入りの方が多い。かなり広い地下室は、パレスチナ難民や、カナダに職を求めて移民してきたけれども、就職できないでいる者などの、一時の避難所にもなっている<sup>4)</sup>。サレーモスクは、もともとプロテスタント系のキリスト教会であったが、売りに出されたのをムスリムが購入して、イスラームの礼拝所にしたものである<sup>5)</sup>。

イスマーイーリーのモスク (The Ismaili Jamatkhana and Center) はバーナビーにあり、学校、図書室、クリニック、結婚披露宴会場などの施設がある<sup>6)</sup>。シーア派の小さなモスクがリッチモンドにおかれている。エジプト人ムスリムは、全員がスンニ一派に属し、これらのモスクには、見学には行くけれども、礼拝はおこなわない<sup>7)</sup>。

ハラール食肉店は、ヴァンクーヴァーに3軒、サレーに1軒あり、サレーの店は海産物もあついている。そのほか、中東から輸入したかんづめや冷凍食品、アラビア語の新聞・雑誌、エジプト映画のレンタルビデオなどをあついているジャックの店や、イスラーム関係の書籍を売る店もヴァンクーヴァーにある。

オークリッジ・コミュニティ・センターは、大祭イード・アルアドハー<sup>8)</sup>の時の礼拝所であり、アラビア語学校、夕方にエジプト人同士が集まってスポーツをおこなう場所にもなっている。

バーナビーのヴァンクーヴァーに近い郊外にある、オーシャン・ヴュー・メモリアル・パークの一角には、1976年から BCMA によってムスリム用の墓地が購入され、埋葬がおこなわれている。このほか、イスラーム専用の施設ではないが、ブリティッ

3) 1965年ごろから建設計画がたてられていた。建設資金は、カナダのムスリムとサウディアラビア、リビアの私的機関からの寄附金でまかなわれた。完成したのは1981年である。1階に大きな礼拝所があり、2階が女性の礼拝所である。遺体安置室、遺体洗浄室などの設備もある。

4) 近隣の一般カナダ人には、「パキスタン・チャーチ」とよばれている。地下の大部屋に、1986年に調査したときには、パキスタン人、パレスチナ人、バングラデシュ人、トルコ人が避難していた。

5) 購入したのは、1975年である。十字架の聖壇や、机や椅子などの不用なものを全部除き、イスラーム式にデザインしなおした。

6) このセンターの建設にあたっては、周辺住民の大きな反対運動があった [片倉 1988a: 706]。

7) スンニもシーアも、どのモスクで礼拝してもよいというたてまえにはなっているが、実際には別れてしまうのが実情である。

8) 犠牲祭ともいう。イスラームの最も重要な祭のひとつで、イスラーム暦のズー・アルヒッジャ月7日から10日にかけておこなわれる。メッカへの巡礼の最後にあたる10日に、メッカと全イスラーム世界では、アブラハムの故事にない、いっせいに神に羊などの犠牲をささげる。

シュ・コロンビア大学の国際会館には、常設の礼拝所があり、子ども会の催しなども、しばしばなされている。

## 2. 世帯規模と年齢構成

独身者の6世帯、および離婚した女性とその子どもが兄の家族と同じ家に住んでいる例を除き、全世帯が夫婦と未婚の子どもで構成される核家族である。

50世帯中4人家族と5人家族が最も多く、4人家族は全体の50%、5人家族は18%を占める。7人以上の家族は存在しない。平均世帯規模は3.76人、約4人である(表1)。

一世帯の平均子ども数は1.92人、約2人である(表2)。世帯主および配偶者は男女ともに、30代が最も多く、40代、50代がそれに続く(表3)。

男性は30代16人、40代15人、50代10人と、働きざかりが9割を占め、60以上の高齢者は3名だけである。女性は30代が44人中23人と最も多く、40代11人とあわせて、全体の4分の3を占める。最高齢の男性はリッチモンド在住の退職者で68才、最高齢の女性はその妻63才である。

20代の独身世帯主たちも含め、世帯主は、全員エジプト生まれで、カナダ生まれの2世はいない。

表1 世帯員数

1世帯の人数	世帯数	% (50世帯中)
1 (人)	6	12
2	2	4
3	5	10
4	25	50
5	9	18
6	3	6
合計	50世帯	100%

表2 一世帯の子ども数

子ども数	世帯数	子ども数合計	% (50世帯中)
0	8	0	16
1	5	5	10
2	23	46	46
3	11	33	22
4	3	12	6
合計	50世帯	96人	100%

表3 年齢構成(世帯主と配偶者)

年齢	男	女	合計	男%(93人中)	女%(93人中)	合計%(93人中)
20~29	5	4	9	5.4	4.3	9.7
30~39	16	23	39	17.2	24.7	41.9
40~49	15	11	26	16.1	11.8	27.9
50~59	10	5	15	10.8	5.4	16.2
60以上	3	1	4	3.2	1.1	4.3
合計	49人	44人	93人	52.7%	47.3%	100%

表4 子ども(被扶養者)の年齢

年齢	男	女	合計	男%(96人中)	女%(96人中)	合計%(96人中)
0~4	9	7	16	9.4	7.3	16.7
5~9	11	13	24	11.5	13.5	25.0
10~14	12	13	25	12.5	13.5	26.0
15~19	5	8	13	5.2	8.3	13.5
20~29	6	8	14	6.3	8.3	14.6
30以上	1	3	4	1.1	3.1	4.1
合計	44人	52人	96人	46.0%	54.0%	100.0%

子どもの年齢は5~19才までが半数を占める(表4)。20代後半から30代の者を除き、大部分がカナダ生まれの2世である。

### 3. 就業状態

先に述べたように、カナダでは1967年以降、学歴、経験、職業技能などを重視する点数制度を移民法に取り入れている。このため、これ以降の移民には、高学歴の専門職やホワイトカラー層が大部分を占める[片倉 1988a: 700]。ヴァンクーヴァーのエジプト人は、点数制度以降に移民した者が多く、医療、教育関係の専門職につく者、技師、会計士、会社員などのホワイトカラー層が全体の60%近くを占める。1984年か

表5 世帯主と配偶者の職業

職業名	男	女	合計	男%(93人中)	女%(93人中)	合計%(93人中)
医療関係	8	4	12	8.6	4.3	12.9
教育関係	1	6	7	1.1	6.4	7.5
ホワイトカラー	26	10	36	28.0	10.8	38.8
サービス業	3	1	4	3.2	1.1	4.3
ブルーカラー	4	—	4	4.3	—	4.3
主婦	—	21	21	—	22.6	22.6
学生	3	1	4	3.2	1.1	4.3
退職者	2	—	2	2.1	—	2.1
無職	2	1	3	2.1	1.1	3.2
合計	49人	44人	93人	52.6%	47.4%	100%

「医療関係」 医師、精神病医、看護婦、物理療法関係者を含む。

「教育関係」 小・中・高校、大学関係者

「ホワイトカラー」 会計士、技師、技術者、会社員、建築家、秘書、コンピュータ・プログラマー

「サービス業」 旅行代理店勤務、店員、パートナー

「ブルーカラー」 船大工、ガードマン

表6 出身国別アラブ移民のカナダでの就業状態  
1956~1974 (%)

出身国	専門職	下層ホワイトカラー	サービス業	農業	ブルーカラー	無解答	合計	全労働者数	全移民者数	無職%
アルジェリア	57.97	17.39	10.14	3.62	9.42	1.45	100	138	221	37.56
アラビア	19.49	16.91	13.60	8.09	40.07	1.84	100	272	536	49.25
バハレーン	31.43	48.57	2.36	—	14.29	2.86	100	35	92	61.96
エジプト	39.21	37.15	3.44	0.17	17.71	2.32	100	8,033	17,104	53.03
イラク	39.56	23.59	3.44	—	30.47	2.95	100	407	892	54.37
ヨルダン	20.31	20.69	5.11	0.38	46.36	7.15	100	783	1,562	49.87
クウェート	47.77	22.68	3.78	—	24.74	1.03	100	291	579	49.74
レバノン	21.65	17.22	12.37	4.88	38.82	5.06	100	6,863	14,396	52.33
リビア	56.64	27.43	2.65	—	12.39	0.88	100	113	274	58.76
モーリタニア	60.00	40.00	—	—	—	—	100	5	12	58.33
モロッコ	20.76	45.70	8.95	0.30	22.12	2.16	100	1,989	5,139	61.30
カタール	9.09	54.55	—	—	36.36	—	100	11	22	50.00
サウディアラビア	56.76	23.42	—	1.80	17.12	0.90	100	111	247	55.06
スーダン	55.10	33.67	2.04	—	9.18	—	100	98	228	57.02
シリア	22.56	17.24	5.83	1.20	47.77	5.40	100	1,166	2,391	51.23
チュニジア	40.07	14.80	18.41	1.08	23.10	2.53	100	277	406	31.77
イエメン	50.00	37.50	—	—	12.50	—	100	8	19	57.89
合計	30.17	28.30	7.50	1.96	28.54	3.53	100	20,600	44,120	53.31

出典 Baha Abu-Laban, *An Olive Branch on the Family Tree; The Arabs in Canada*. McClelland & Stewart and Canadian Government, 1980, p. 117. アンダーラインは、筆者による。



ら86年にかけて、カナダは経済的に不況であり、そのあおりをうけて人員整理の対象になったエジプト人もいた<sup>9)</sup>。無職の男性のうち、1名は、本業は建築家であるが、1986年現在失業中(M.T.)。もう1人は、1985年までノース・ヴェンクローヴァーの造船所に勤務していたが、やはり失業した(R)。1984年に Simon Fraser Book Shop をレイオフされ、語学センターの警備や、アラビア語の翻訳の仕事などを行っている者もいる(A.M.)。女性も、44人中21人が職をもち、コンピュータ・プログラマー、教師、建築技術者など、専門職に従事している者が多い(表5)。

カナダ全体におけるエジプト人の就業状態を見ても、表6にみるように、76%以上が専門職、ホワイトカラー層である。他のアラブ移民と比べて、ブルーカラーの割合は比較的少ない(表6)。

ヴェンクローヴァーのエジプト人の経済状態は、年収20,000カナダドル(約300万円。1986年現在、1カナダドル=約150円)以上の者が大多数を占める。

#### 4. 世帯主と配偶者のエジプトにおける出生地

彼らの出生地はエジプトの首都カイロが最も多く、半数以上の58%、次がアレキサンドリアの21%である。この2つの大都市で生まれ、成人したものが、80%近くを占める。それ以外には、イスマーイリーヤ、タンタ、シャルキーヤ、ザガズィーク、フ

表7 エジプトにおける出生地(世帯主と配偶者)

地名	男	女	合計	男% (81人中)	女% (81人中)	合計% (81人中)
カイロ	27	20	47	33.3	24.7	58.0
アレキサンドリア	11	6	17	13.6	7.4	21.0
イスマーイリーヤ	4	4	8	4.9	4.9	9.8
タンタ	2	2	4	2.6	2.6	5.2
ザガズィーク	1	1	2	1.2	1.2	2.4
シャルキーヤ	1	—	1	1.2	—	1.2
アシュート	1	—	1	1.2	—	1.2
ファイユーム	1	—	1	1.2	—	1.2
合計	48人	33人	81人	59.2%	40.8%	100%

非エジプト人配偶者は含まない。

9) 1989年には、カナダ経済は好況に転じている。いったんレイオフをおこなった企業の一部などでは、再雇用をしていないため、少人数で仕事におわれ、土曜日にも出勤せねばならないエジプト人がいる状態であった。B.C. ハイドロに勤める Su をはじめ、エジプト人の中で昇格しているもの5人が目立つ存在であった。エジプト人コミュニティの人々は、彼らのことを話しながら、エジプト人ムスリムがカナダ社会で成功をおさめていることを強調していた。失業中であったエジプト人も、それぞれみんな再就職をしていた。



飛躍的に増大している [片倉 1988a: 702]。

男性では、1970～74年にカナダへ移住してきた者が最も多く16名、1965～69年が14名、1958～64年が5名で、1974年までにカナダへやってきた者が70%である。最も早くカナダにやってきたのは、下エジプトのタント出身の M.A. で、エジプト本国では地主だったが、ナセルの土地改革のあと、1958年に移民した。

女性も、1970～74年の移住が最も多く14名である。1958～64年の6名、1965～69年の5名をあわせると、1974年までに移住した者は80%にのぼる (表8)。

エジプトから直接カナダにわたったのではなく、カナダ以外の国を経由してやってきたケースも多い。エチオピア人の父をもつ Ab は、カナダにやってきたのは1982年であるが、エジプトを出たのは1972年で、サウディアラビアに滞在していた。Ng は、1970年にエジプトを出て、1979年までクウェートで生活していた。M.F. は、同じく1970年に、両親と弟とともにクウェートに行き、1972年にカナダに来了。1954年に出国して58年までイラク、68年までイギリスにいた Si は、エジプトへの帰国も考えたが、結局カナダへやってきたという。

ナセル政権は、社会主義化経済政策をおしすすめ、農地改革、スエズ運河会社など大規模企業の国有化、外貨規制の強化、厳重な為替管理などをおこなった。その一方で、いわゆる「近代化」を指向し、アズハル大学勢力との緊張関係激化、「イフワーン・ムスリミン」弾圧事件など、イスラーム原理主義勢力と対決・圧迫する姿勢をとった。その結果、西欧化されたキリスト教徒のブルジョア階級とともに、比較的富裕なムスリムも、財産の保全や、将来性、信仰の問題などから、エジプトを離れる者が多かった。ヴァンクーヴァーのエジプト人ムスリムにも、ナセルの政策に対する批

表8 カナダ移住年次と滞在年数

カナダ移住年次 (滞在年数)	男	女	合計	男% (81人中)	女% (81人中)	合計% (81人中)
1958～1964 (28～22年)	5	6	11	6.2	7.4	13.6
1965～1969 (21～17年)	14	5	19	17.3	6.2	23.5
1970～1974 (16～12年)	16	14	30	19.7	17.3	37.0
1975～1979 (11～7年)	8	7	15	9.9	8.6	18.5
1980～1982 (6～4年)	5	1	6	6.2	1.2	7.4
合計	48人	33人	81人	59.3%	40.7%	100%

非エジプト人配偶者は含まない。

判者が多い。とくに65年前後にエジプトを離れた人にその傾向がみられる。Ng など、カナダへの移民たちによれば、ナセル以前は、土地をもたない者を、土地所有者が面倒をみてくれ、事実上家族のような形がとられていた。土地のない者でもそれなりに満足した生活を送っていたという。富の分配が悪平等になったともいう。ナセルの土地改革は、彼らの国外移住の大きな要因のひとつであった。

しかし、実際にエジプトを離れたのは農民ではなく、反ナセルのインテリたちが主であった。裕福な一族の出身で、ナセル時代に財産を没収されたとする者 (M.A., A.N.), 1967年の中東戦争の頃からエジプトに失望し、みきりをつけて外国へ移住することにしたという者 (Ng), エジプトでは自分の能力を充分にいかせないと考えた者 (Za) などである。カイロ大学教授の父親をもつ男性 A.M. は、母親はドイツ人で、ドイツで生まれた。1才のときエジプトに戻り、カイロで育ったが、26才から31才まで再びドイツにいた。ナセル時代にユダヤ人問題でドイツとエジプトの関係が悪化し、やむなくカナダへ移住したという。

ヴァンクーヴァーのエジプト人たちが、移住先として経済的により豊かなアメリカを選ばなかったのは、アメリカに対しよい印象をもっていないことが、理由のひとつである。アメリカ人は尊大 (arrogant) であるとして、反米感情をもっている者が多い。カナダが政治的に中立であることを、カナダへの移住の理由にあげている者も多い (A.B.D. など)。

### Ⅲ. 社会的ネットワーク

本章では、ヴァンクーヴァーにおけるエジプト人ムスリムの社会的ネットワークのパターンを、地縁関係、親族関係の両面から考察する。地縁関係は、ヴァンクーヴァーという居住地を縁にして作られたネットワークである。ここでは、エジプト人、エジプト人以外のアラブ、アラブ以外のムスリム、英仏系カナダ人、ユダヤ人の5つのカテゴリーにわけて考察する。次に、ヴァンクーヴァーという土地とは関係なく、遠隔の地における親族とどういう関係をもち続けているか、あるいはもっていないかについて考察する。

#### 1. ヴァンクーヴァーにおける地縁関係

##### 1) エジプト人との関係

ヴァンクーヴァーのエジプト人ムスリムの中で、市内に親族がいる者は一例しか

い。ヴァンクーヴァーに来てから初めて知りあった者同士がほとんどであるが、社会的に最も結びつきが深いのは、やはり同じエジプト人である。彼らは、宗教と言語を同じくし、非イスラーム社会にいるエジプト人移民としての経験を分かちあうことができるばかりでなく、先述した移民政策、点数制度を通過してきた故、ほぼ同水準の教育を受け、ほぼ同様の経済的背景をもち、専門職やホワイトカラーへの職業志向をもっている。

エジプト人同士のつき合いには、エジプト本国にいたときと同様の特徴が、全体に共通してみられる。すなわち、ひんぱんに訪問し合うこと、個人単位より家族単位のつき合いであること、相互扶助が義務化されていることなどである。

図1に見るように、ヴァンクーヴァーのエジプト人の居住地は、空間的には分散している。このため、コミュニティのメンバーはゲッター的なきずなはもっていない。しかし、分散して住んでいても、友人同士の訪問はひんぱんである。エジプト人は、毎日職場で顔を合わせるカナダ人より、たまにしか顔を合わせないエジプト人コミュニティに親近感と帰属意識をもっている。子どもたちも、毎日学校で顔を合わせるカナダ人よりも、エジプト人コミュニティの子どもたちの方に親近感をもっている。

イード・ル・フィトル<sup>10)</sup>やイード・アルアドハー、マウリドンナビー<sup>11)</sup>などの宗教的な行事の際には、互いの家に集まって食事をしたり、パーティをひらいたりする。キリスト教徒のカナダ人と同じように仕事をするため、ムスリムの祭りの時期に合わせて休日をとれない者は、訪問の代用として、頻繁に電話をし合い、コミュニティの一員として、認められるよう努力をする。イードのときのジャーラ<sup>12)</sup>は、アラブ・コミュニティにおけるエジプト人同士の、義務に近いものとなっている。

日常的な交際もひんぱんにおこなわれる。エジプト人コミュニティの人口は、比較的小さいので、たいていのメンバーは、NFECs や、BCMA などの組織の社交行事で知り合うことができる。

10) 断食明けの祭。小祭ともいう。ラマダーン月の次の、シャッワール月の第1日めから、3日間続く。ムスリムは、断食によって1年間の罪が許されるとし、新しい気持で祭をむかえる。

イード・アルアドハーと同様、服を新調し、早朝にモスクに出かけ、昼と夜は親戚や友人を訪問し、食事を楽しむ。

11) マウリド(生誕祭)は、ムハンマドや聖者の誕生を祝っておこなわれるものである。中でもイスラーム暦3月12日の預言者ムハンマドの生誕祭マウリドンナビーはイードに次いで、とくにエジプトで盛大に祝われる(サウディアラビアをはじめ、ワッハービズムの影響の強い地域では、偶像崇拝に通ずるとして禁止されている)。エジプトでは、花嫁や動物をかたどった砂糖菓子をつくり、祭のあとで食べるという昔からの習慣があり、ムハンマドの美德や奇跡をたたえる長詩が吟じられたりする。

12) 宗教的には、聖地や聖者の墓に詣でることを言う。毎日の生活では、人々の間の日常的な訪問を意味する。人を訪ねることは、ほとんど義務にされているほどの、アラブの重要な生活習慣である。

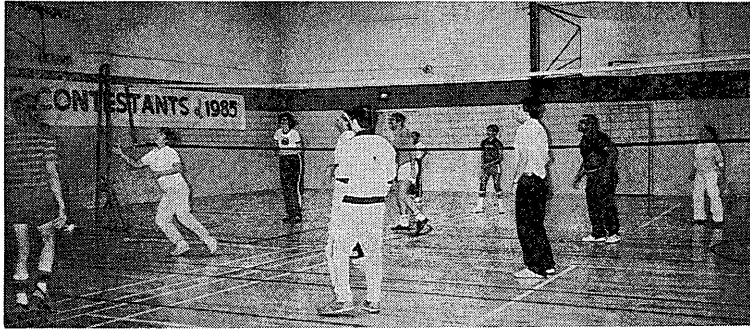


写真1 オークリッジ・コミュニティ・センターでのバレーボール大会

NFECS のメンバーではあるが、孤立感をもっていると打ち明けた30代の独身男性 Mのような者もある。同じ年代の独身者が、会にほとんどいないという理由もあるが、エジプト人は、本国においてと同様、家族単位でのつき合いを大切にするので、一人者は一人前とみなされず、なおざりにされがちになるからでもある。Mの父母はエジプトに住んでおり、毎夏ヴァンクーヴァーを訪れるが、そういう時は、父母とともに、家族づき合いの輪にいれてもらえる。それ以外の1人のときには、もう2年も NFECS のメンバーなのに、既婚者の家に招かれたことがない。しかしそれでも、アラビア語でコミュニケーションができ、同じ文化を共有するエジプト人といっしょに NFECS のもおすすスポーツ会その他の集りには、必ず出席している。カナダ人の友人というより、ほっとするのだという。

エジプト人同士は、宗教的な問題に関しても、世俗的な問題についても、相互扶助のつき合いをしていることが観察される。たとえば、エジプト人ムスリム Aが、イス

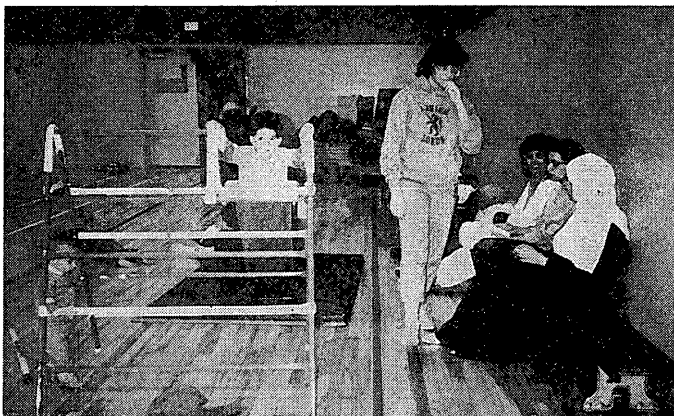


写真2 子どもを遊ばせる母親たち。Tr グループに属するイスラーム服の女性もまじっている。(右手前)

ラームについての疑問をもった。仲間に打ち明けてアドバイスを求めた。相談を受けた側は、他の仲間とさそい合い、議論をする会を週一回おこなうこととした。その会合は、それ以来、筆者の調査終了期まですでに1年以上続いていた。一方、世俗的、日常生活の面では、次のような例をあげることができる。あるエジプト人家族は、ドライブ中のエジプト人の友人から、車が故障したので助けがほしいという電話連絡を受け、即座にその場にかけて行った。そのような事例が日常的にみられる。エジプト人同士の助け合い精神は、アラブおよびイスラームの文化的伝統である。カナダに来てから、英仏系カナダ人をエジプト人に対すると同じように助けようとしたら、変な顔をされ、自分の方に何かおちどがあるのかと思った経験をしたという者も多い。

カナダ社会への同化を望む As グループの者の中には、エジプト人同士のつき合いが感情的でべたべたしすぎるという者もいる。彼らは、後に述べるように、英仏系カナダ人と交際したがっている。しかし、最も親しい友人はやはりエジプト人であり、英仏系カナダ人の友人がいても、それほど親密につき合っていないことが観察される。

ムスリムとしてよりもエジプト人としてのアイデンティティを大切にしている Cu グループの人々の大部分は、NF ECS のメンバーである。NF ECS では、毎年1回、ビュッフェ形式のディナー・パーティを開催して、交際を深めている。このパーティには、エジプト的な催しには顔をみせないことが多い、英仏系カナダ人と結婚した As グループのエジプト人もやってくる。1985年にはシェラトン・ホテルで、アルコール抜きのパーティがひらかれ、ダンスもおこなわれた。ダンスに反対する人、アルコールなしで25ドル60セントの会費は高すぎるという人もいたので、今後は形式を変える



写真3 男ばかりの集りでも、いっさいのアルコールぬき。いつも紅茶とお菓子をかこんでおしゃべりを楽しむ。



写真4 モスクでの女性の集い

かもしれないとパーティの幹事は話していた。ダンスやアルコールへの反対は、宗教的な理由によるものではなく、エジプトでは、男女で踊ったり、アルコールを飲んだりする習慣がないからだという。紅茶やソフトドリンクを飲みながらおしゃべりをするのが、エジプト式の交際である。カナダ式パーティは、会場のホテル側のすすめでやってみたが、やはりびったりしない。

ムスリムとしてのアイデンティティを大事にする Tr グループのエジプト人の中には、NF ECS の会合に集まる人々について、批判する者もいる。西欧文化志向が強いとか、モスクにあまり来ないというのである。彼ら自身は、モスクで会う人たちとの交際を大切にしている。モスクでは、1階は男性、上の階は女性にわかれての礼拝をおこない、そのあとも、それぞれのおしゃべりを楽しむ。ときには、1階の大食堂を2つにしきって、男女別々に、もちよりパーティをひらく。この集りは、1983年頃までは、1月に1回おこなわれていたが、最近メンバーの多くが忙しくなり、2～3カ月に1度になっている。この集りでは、モスクの維持費のための基金をつみたてるといった事業もおこなわれている。メンバーは、ムスリム同士は、きょうだいであると意識し、“brother” “sister” を Mr., Mrs. などの代りに用いて互いをよび合っている。

## 2) エジプト人以外のアラブとの関係

エジプト人と、それ以外のアラブ（レバノン人、シリア人、アルジェリア人、ヨルダン人、イエメン人など）との交際は、エジプト人同士のように親密性の濃いものではない。しかし、共通の言語、アラビア語をもつ同士としての親近感もっている。互いに、食物や音楽などの好みも似ており、同じアラブ的食品を買いに來たり、アラビア語の新聞を求めに來た際、ジャックの店などで知り合うことも多い。生活スタイル



ルの類似性に加えて、アラブのアイデンティティに結びついた価値観や基準をもっているため、社会的な関係や交際ができやすいことが観察される。エジプト人ムスリム、とくに Cu グループと他のアラブとは、英仏系カナダ人や他の民族集団の者とのつき合いに比べ、はるかに折り合いがよいといえる。NF ECS のディナー・パーティーには、レバノン人などのムスリムやシリアのクリスチャン・アラブも招待されて、出席している<sup>13)</sup>。

### 3) アラブ人以外のムスリムとの関係

エジプト人ムスリムとフィジー人はじめ他の国からのムスリム<sup>14)</sup>は、ムスリムとしてのアイデンティティがあり、同じ信仰をもち、その実践を同じくしているという自覚が互いの間に存在している。とくに Tr グループのエジプト人ムスリムは、価値観や宗教がまったく異なっている英仏系カナダ人といえるよりも、他のムスリムと共にいるときの方が、ずっとくつろげるという。他のムスリムとの交流の機会としては、NF ECS の集りや、BCMA の会合、リッチモンドやサレーのマスジドなどがあげられる。NF ECS のパーティには、ユーゴスラビア、南アフリカ、フィリピンなど多くの国からのムスリム移民が出席する。

しかし、エジプト人ムスリムが皆、他のムスリムと親しい感情をもったり、親しい関係にあるわけではない。英仏系カナダ人志向型の As グループの者はもちろんのこと、Cu グループの者たちでさえも、アラブ以外の地域からのムスリムには接触の機会が少なく、あまり親しみを感ぜないという。インド、パキスタン人に対しては、「きたない」「いやしい」と顔をしかめる者さえみられる。

### 4) 英仏系カナダ人との関係

エジプト人ムスリムの多くは、日常生活において、英仏系カナダ人と接する機会が最も多い。しかし、それは、頻度の上でのことであり、質的には深いつき合いではない。職場のみでの交際がほとんどで、職場以外のところでつき合うことはまれである。唯一の例外は、たまたま共通の趣味をもっている場合である。たとえば、野鳥に興味をもっているエジプト人とフランス系カナダ人は、家族ぐるみでヴァンクーヴァー近郊に、ピクニックに出かけたりする。家に帰ってから電話のやりとりをしたり、家での夕食に招待し合うこともある。スコットランド出身のカナダ人の同僚と、音楽の

13) そういうパーティの席で、クリスチャン・アラブがアルコール類を自分たちのテーブルにだけ頼み、飲んでいる姿もあった。アラブムスリムは、それに対してきわめて寛容で、何の反応も示さなかった。

14) ヴァンクーヴァーのムスリムには、フィジー、パキスタン、トルコ、インドからの移民が多い。詳細は [片倉 1988a: 694-697] 参照。

趣味を通じて親しい関係をもっているエジプト人ムスリムもいるが、これも例外的である。

同化型の As グループのエジプト人は、英仏系カナダ人となるべく交際したいという意志があり、職場以外での接触をもとうとつとめる。彼らは、少なくとも1人のカナダ人の友人をもち、食事に招待する、昼食の時に会う、電話をかける、スポーツなどの活動を共にするなどの交際はしている。しかし、エジプト人同士の交際のような親密感、どうしても得られないという。

エジプト人と英仏系カナダ人との交際が深まらない理由として、飲酒習慣の問題、友情についての考え方の違い、感情表現の相違が考えられる。

飲酒の問題については、後に詳述するが、As グループのエジプト人ムスリムでさえも、職場の同僚などが酔っているのを見ると居心地の悪さを感じるという。Cu, Tr グループのエジプト人たちは、自分たちが酒を飲まないために偏見をもってみられたり、無視されているように感じたりする。そこで、彼らは、仕事帰りにバーへ行く同僚をさげ、食事にワインの出る友人の招待を断わるようになり、そのためにカナダ人との交際の機会が減るということになる。

友情についての考え方や、感情表現の相違も、両者の交際が深まらない要因になっている。「英仏系カナダ人は一般に自分たちよりも感情表現が乏しく、冷たく、交際のきっかけも少なく、たとえ、少しつき合い出しても長続きしない」と、多くのエジプト人ムスリムは考えている。イギリス系カナダ人たちが、友人の妻の死の知らせに、「カードを送る」という行為がしきしないことに、エジプト人たちは驚く。エジプト人同士なら、なにはさておき、友人のそばにかけつけ、ついていてあげるのがごく当然である。そのようなことをするのは「さしでがましい」といったカナダ人のよそよそしさ、冷たさに、エジプト人はついていけないという。エジプト人と英仏系カナダ人の子ども同士が仲よくなっても、カナダ社会ではそれは子ども同士のこととされ、親同士の交際にはならないことも、エジプト人同士の交際と異なる。エジプト人は、エジプト本国でと同様、家族員の一部のつき合いが、すぐに家族ぐるみになるのが通例である。

一般に英仏系カナダ人は、こちらから好意を示さないかぎり、うちとけないという。この現象は、ヴァンクーヴァーのみでなく、モントリオールのエジプト人コミュニティの調査においても、指摘されている [WASSEF 1977: 210]。

##### 5) ユダヤ人との関係

ユダヤ人との関係は、一般に予想されるよりも良好なものである。一般のアラブと

同様、エジプト人の間にも、イスラエルという国に対する警戒心や反感は存在している。しかし、個人的な反感や憎悪が存在しないことは、エジプト本国のエジプト人の場合と類似している。カナダに移民して来たエジプト人ムスリムは、アラブ文化とユダヤ文化の間にかかなりの共通性のあることを、あらためて意識するにいたっている。ユダヤ人は同じ「アハル・ル・キターブ」<sup>15)</sup>であり、通婚も認められる仲であること、食事の嗜好をはじめ、生活習慣も非常に類似していることを認識し、カナダでは同じマイノリティ同士であり、ある種の民族的差別を受ける者同士であることが、両者をかなり親密な紐帯で結びつける結果となっている。ユダヤ人と食事をともにすることもあり、ユダヤ教徒は、イスラーム教徒よりも多くの食事制限があることに同情したと語るエジプト人ムスリムもいる。ユダヤ人とエジプト人ムスリムが個人的な交際に入るきっかけに、中東の食料品を扱っている店に、同じように買物に来て知り合ったという者が多い。エジプト本国が、サダト政権のもとに、イスラエルと国交回復して以後は、イスラエルのユダヤ人との交流が出てきたが、その余波は、ヴァンクーヴァーにも流れこんできている。ヴァンクーヴァー在住のエジプト人Aの甥がカイロでイスラエル女性と結婚し、Aをたよりに、職を求めてヴァンクーヴァーにやって来た事例もある。カナダも不景気で、就職は思うにまかせず、Aの甥夫婦は6カ月余の居候をした後、エジプトへ戻っていったが、その間、エジプト人コミュニティの集いには、そのイスラエル女性の姿がいつもみられ、彼女を縁にしてエジプト人コミュニティとカナダ在住のユダヤ人とのつき合いがはじまっている。そういうつき合いの広がりの中で、クラシック音楽の趣味が同じと知って、互いの家に音楽をききに行き来したり、コンサートにいっしょに出かけたりしているケースもある。

## 2. エジプトおよび他の地に在住する親族との関係

さきに述べたように、ヴァンクーヴァーのエジプト人は、親族が共に移民し、移住後もかたまって生活しているフィジー、マレーシア、イタリア、中国などからの移民たちとは、大きく異なっている。エジプト人ムスリムには、ヴァンクーヴァーに自分の家族以外の親族がいることは1例を除いては皆無であるが、エジプト本国在住の親族とは、意識の上で、同じ場所にいるのと同じ程度に彼らの生活に大きな意味もっている。交通費が高つくため、しばしば帰国することはむずかしいが、20年もヴァ

15) 「啓典の民」すなわち、神が啓示した聖書(コーランでは、モーセ五書、詩篇、福音書)をもつ民を意味する。ユダヤ教徒、キリスト教徒をこのようによぶ。彼らは、本来はムスリムと同じ信仰の持主であり、神と最後の審判を信じ、善行を重ねれば、天国へ行くことができるとみなされている。

ンクーヴァーに住んでいる者でも、エジプトの親族とは親密な感情と意識を保っている。

カナダに移住してから最初に本国を訪れることができるようになるまでには、平均7年ほどかかっている。それを目標にがんばってきた者が多い。いったん生活が安定すると、ほとんど毎年1回は、エジプトに一時帰国する。そのときには、長期間滞在し、親族のために献身的につくし、集約的に関係を深めようとする。友人よりも、親族を優先するのは、アラブの一般的な傾向である。カナダに来て16年になる Ng, Fa 夫妻は、カナダに永住することに決めてはいるが、1～2年に1回くらいは必ずエジプトに帰ることにしている。ヴァンクーヴァーには親しい友人が多く出来たが、やはり親族に会いたいし、そうするのが、アラブとしての義務であるという。このほか、結婚相手をさがす、出産といった目的のために、エジプトの親族をたよって一時帰国する例もある。

エジプト人ムスリムが、本国の親族との強い結びつきを大事にするのは、「家族を最も大事にし、たよりにする」というアラブ的価値観のためでもあるが、子どもたちが親族と接することによって、イスラーム的環境の中で生活している人々と親しくなり、宗教教育上良い影響をうけるのを期待していることもあげられる。カナダ移民の中で、成功をおさめ、かなり裕福になった者たちの中には、子どもたちがエジプト人親族を知るため、エジプトに何度も行けるように、カイロに部屋を借りる者もいる。

エジプトの親族との接触は、一時帰国する以外は、手紙や電話を通じておこなわれる。エジプト人ムスリムは、本国の親族にカナダを訪れるようにすすめたり、カナダに移住するよう望む者も多い。

30代前半の女性で、2人の子もちである Mn は、1979年以来ヴァンクーヴァーに住み、自分の兄弟姉妹もカナダに移住させようと努力してきたが、移民政策により、親や子の保証人資格が制限されているため、うまくいっていない（カナダの移民法については、[片倉 1988a: 690–691] 参照）。Mi の場合は、母親をカナダへ招くことができた。彼女は、当初、永住するつもりであったが、カナダでの生活が本国とは違いすぎるといって、8カ月後にエジプトに帰ってしまった。Mi は、サウディアラビアにいる祖母へ、彼女の兄弟を通じて定期的に送金している。Mi の祖母は、女性の親族から直接に送金をうけることを好まない。男性親族からの送金をうけとることが、アラブ的習慣だからである。

As, Cu, Tr グループとも全員、エジプトの親族との結びつきは強いが、いずれエジプトに戻って生活したいと考えている者が多いのは、Cu グループだけである。30

代前半の独身男性 Ma は、高給を支払われる仕事をもち、快適な暮らしをしているが、カナダを故郷とはよぶことができないという。彼の両親や兄弟姉妹は、何年かカナダに住んだだけで、エジプトに帰ってしまった。カナダ人の友人は、彼が親族との間にもっていた深い結びつきの代りになることができないという。しかし彼は、エジプトに帰ることは、アンビバレントな感情をもっており、孤独感にうちかかって、ヴァンクーヴァーでの生活に適応していくべきかどうか、迷っている。彼らが帰国を望む理由には、親族との結びつきのほかに、カナダの就職状況が期待していたほどよくなかったこと、英仏系カナダ人の間にアラブ、ムスリムに対する偏見が存在することなどがあげられる。Sa のように、エジプトでは最高級のインテリなのに、カナダではそれ相応の扱いをうけないという不満をもつ者もいる<sup>16)</sup>。

言葉遣いの物柔かな R も、エジプトに戻るかどうか、ジレンマにある。調査当時彼は失業中で、そのことに彼は不満を感じ、カナダでの生活は期待に反したものと考えていた。しかし、彼が帰国するのをためらっているのは、自分の子どもたちが、エジプトでは、カナダのようなさまざまなチャンスにめぐりあえないのではないかと恐れているからである。

Cu グループの者は、カナダの生活に不満をもちながらも、エジプトに帰国しない理由として、カナダには、さまざまな、巾広いチャンスが存在すること、エジプトには良い職がなく、あっても低賃金であることをあげる。M は、エジプトの親族との結びつきは強いが、カナダにある程度適応してきたことによって、もはやエジプトに戻って生活し、働くことはできなくなったという。

As グループの場合、前述のような悩みはあっても、エジプトに帰国するよりは、カナダ社会にいながらアイデンティティを確立するという解決策をとろうとして、Tr グループに移行するケースが多い。

Tr グループの中には、ムスリムがマジョリティをしめるエジプトに戻りたいという者もいる。親族その他の問題のほかに、カナダ社会では良きムスリムとして生きていくことがむずかしい、とくに、後に詳述するように、子どもたちの宗教教育に支障をきたす、ハロウィーンやクリスマスなど、キリスト教の行事にうつつをぬかしたりする、将来の結婚相手のことが心配だ、などの理由からである。しかし、地球上どこにいても、良きムスリムであり得るのだと主張する者の方が多く、実際にエジプトへ戻った者はいない。

親族と離れているための問題は、親族にカナダを訪問あるいは移民するようすすめ

16) 1989年の追跡調査によれば、大学助教授 Sa の一家などは、エジプト本国へ帰国した。

ることや、経済状態が許す限り、たびたびエジプトに一時帰国して親族に会うことで、ある程度解消されている。

エジプト人ムスリムは、同じエジプト人コミュニティ内部でのつき合いを最も好み、エジプト風の交際をし、エジプト本国の親族との結びつきが強い傾向にあると結論できるが、それは、カナダにおいて彼らが排他的な存在であることを意味しない。エジプト人コミュニティには、つねに何人かの非エジプト人、あるいは非ムスリムの人もまじっており、こだわりのない社交生活も活発に展開しているのがみられる。

3 類型の、社会的ネットワークの特徴をまとめてみると、次のようになる。

- ①As グループ——エジプト人同士のつき合いは、濃厚すぎると考えている。英仏系カナダ人との交際を望んでいるが、文化的な違いが大きいため、あまり機会に恵まれない。
- ②Cu グループ——エジプト人同士のつき合いを、最も好む。他のムスリムとは、文化的に違いすぎて親しめないと思う。モスクへは行かない者が多いので、他のムスリムと知り合う機会が少ない。経済的な理由などからエジプトへ帰りたがっている者がおり、実際に帰国した例もある。
- ③Tr グループ——イスラーム的生活様式を守る上での悩みはあるが、エジプトへ帰国した者はいない。カナダ人や他のエジプト人とのつき合いよりも、非エジプト、非アラブのムスリムたちとのつき合い、ムスリムとしてのアイデンティティによりどこを求めている。モスクによく行き、そこで出来たネットワークを大事にしている。

## Ⅳ. 生活様式の変化と不変化

### 1. 言語と教育

カナダのアラブ移民の新世代の間で、アラビア語能力が低下していることは、すでに述べた [片倉 1988a: 720-721]。ヴァンクーヴァーのエジプト人の新世代も同様の現象がみられる。親たちの多くは、子どもにアラビア語やイスラーム的価値観を教えるために、さまざまな努力を払っている。本章では、アラビア語教育、イスラーム教育の問題を中心とした学校教育、家庭教育について述べる。

#### 1) アラビア語教育

Cu グループ、Tr グループのエジプト人にとっては、アラビア語教育はきわめて重

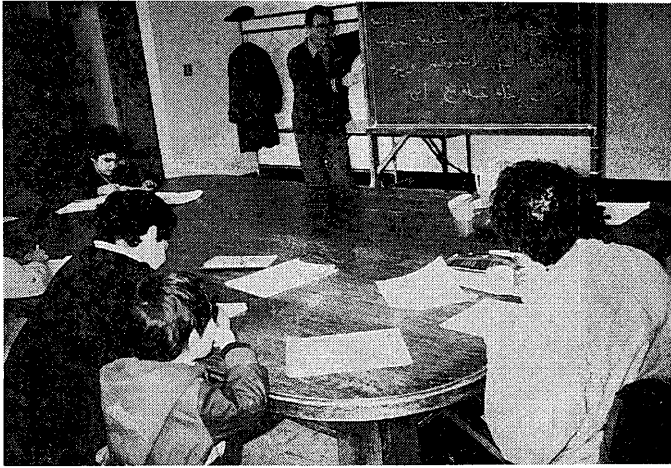


写真5 アラビア語学校の授業風景

要なものと考えられている。それは、コーランやハディースの原典に触れるため必要であるとか、エジプトに里帰りしたときのためであるとかよりも、「神の言葉」としてのアラビア語に無条件な価値がおかれていることに由来するものである。

ヴァンクーヴァーには、2つの私立アラビア語学校がある。ひとつは、オークリッジ・コミュニティ・センターでひらかれ、男性のエジプト人教師 Si<sup>17)</sup>が教えている。16人の生徒が登録している。うち8人がエジプト人で、ユーゴスラビア人3人、シリア人3人、レバノン人2人である。生徒の年齢は、7～14才までである。授業は週2時間、土曜日の朝におこなわれ、正則アラビア語が教えられている。子どもたちの送迎は、父母が車でしているのが大部分で、アラビア語の授業の間、週末のショッピングに行くこともあるが、授業を熱心に参観している親たちが多い。

他のひとつは、サレー・モスクであり、ここでも正則アラビア語の授業を Si がうけもっている。ここには、サレーおよびその近くに住む7才～14才の子どもたちが11人集まり、週1度2時間、水曜の夕方にアラビア語を勉強している。

アラビア語学校の教材は、小学生初年用の本をエジプトからとりよせてコピーしたものと、小さい子どものためのアラビア語読本である。1983年に設立され、最初はクリスチャンのエジプト人教師が教えていた。現在の教師 Si はムスリムだが、イスラームのためのアラビア語よりも、アラビア語そのものに重点をおいている。したがって、

17) 62才の退職警察官。エジプトでは、ナセルの秘密警察のメンバーであったが、反ナセルに転じ、1954年にエジプトを出てイラクに移った。妻はチェコスロバキア出身。イラクで結婚し、1972年にカナダへ移民した。

コーランのアラビア語などのイスラーム的アラビア語を教えてほしいという提案<sup>18)</sup>が、親たちの一部からあっても、クリスチャンにもアラビア語をやらせたいと主張し、イスラーム的アラビア語を教えてはいない。現在、アラビア語学校で教えているのは初歩のアラビア語であるが、上級にすすむにつれて、どういう路線でやっていくかという問題は出てくると、親たちは話し合っている<sup>19)</sup>。

その他に、Za という主婦が、自分の家で個人的にアラビア語クラスをひらいている。このクラスのことは、モスクの告知板にも貼り出され生徒をつのっている。Za は女の子だけを教えていて、現在9人のエジプト人生徒を受けもっている。

そのほかに、共同チームを作ってアラビア語の個人的授業をおこなっている例もある。M, Sa, D が2週間ごとに交代で教えているものである。この私塾は、1980年からはじめられた。その当時には子どものためのアラビア語学校は存在しなかった。その後、リッチモンドの大モスクにあるイスラーム学校が開校されたが、フィジー人やパキスタン人が多く、アラビア語の教育は充分でないとエジプト人たちは考えた。3人は最初それぞれ別々に、ばらばらなやり方で教えていたが、もっと一貫した教育方法が必要だと考えて協力をはじめたという。M, Sa, D の、各々自分たちの子どものためのクラスで、5人がいつも出席しており、授業の方法はかなり組織立っている。子どもたちは宿題を復習し、書取り、単語の練習、アラビア語の句を用いたゲームをする。宗教教育もおこなわれ、コーランの章句を暗記させたり、覚えているコーランの文句を引用させたりする。宿題は、イスラームについての3ページ程度の作文で、テーマは「ムスリムでない人にイスラームについてどのように話すか」というものや、イスラームの5柱についての討論などである。たとえば、英語とアラビア語で子ども用に書かれた、*The Children's Book of Salah*<sup>20)</sup>と題する礼拝についての本<sup>20)</sup>を読むことが課され、実践することを通して、礼拝に関して、次の時間に皆と話し合うというようなことがなされる。

## 2) 家庭教育

ヴァンクーヴァーのエジプト人ムスリムには、子どもたちの教育に熱心な親たちが多い。エジプト人同士が集まると、ヴァンクーヴァーの中学校の良し悪し、子どもをYork House<sup>21)</sup>に入れたい、という話などが話題になることも多い。

18) イスラーム教育に熱心な親たちは、「動物園へお父さんと行きました。」というアラビア語文章を、せめて、「モスクへお父さんと行きました。」にしてほしいと要求する。

19) 1989年7月の追跡調査では、オークリッジのアラビア語学校の生徒は39人に増加している。全員がムスリムになったため、Si は妥協して、イスラーム的アラビア語を教えている。

20) Ghulam Sarwar, *The Children's Book of Salah*, The Muslim Educational Trust, London, 1984.

21) 英国のイートンのように、金もかかるが、名門校として知られている。



教育熱心な親の例として、S・D 夫妻と M・Y 夫妻の事例をあげる。

Sとその妻Dは2人とも技術者としてカナダの会社につとめている。現在公立学校の6年生である息子 Ah を、いずれ私立の名門校に入れたいと願っている。夕食のときには、いつも学校での勉強が話題にのぼる。両親は Ah に、どの教科の宿題がどれだけあるか尋ね、夕食のあとすぐに宿題にとりかかれるように心を配る。両親そろって数学の宿題をみてやり、答が正しいかどうか確かめる。

母親が職業をもっているので、子どもたちを、グランヴィルの近くの保育所 (Day Care Center) に預けている。娘 (4才) は朝8時から、息子 (11才) は学校から帰ってくる3時半頃から、母親が、ときには父親が2人を迎えに行く夕方5時までここに預けられている。

この保育所では、10人の生徒に3人の保育者がついている。保母たちは、きめられたノートブックに、毎日、その日子どもと共にやったこと、読んだ本、子どもたちの健康状態など、1人1人について記録する。迎えにきた親がそれを見て、その日の子どもの様子を知ることができるようになっている。保育料は、朝8時から夕方5時までの場合、430カナダドル (約64,500円 1986年現在)、3時半から5時までの場合130カナダドル (約19,500円) が支払われている。

週1回土曜日の朝のアラビア語学校の教育は、家庭でも、重視されている。M・Y 夫妻は、子どもたちがテレビを見ているのを中断させ、まずアラビア語学校の宿題をやり、それから一般学校の宿題をするようにいう。子どもたちは、アラビア語の英訳の宿題をするのに、しばしば母親に助けを求め、彼女も宿題がどれだけすすんでいるか時々チェックしている。

たいていのエジプト人ムスリムと同様、M・Y 夫妻も家庭環境が子どもの教育に大きな影響を与えると信じている。エジプト人家庭のおよそ70%ぐらいは百科辞典を家にもっているが、M・Y 家には百科事典が2セットそろえられている。兄の Mu (15才) はしばしばそれを使うことが習慣になっている。妹の Sa (9才) も使うように父母からいつも言われている。Mu は父親とコンピューターを共有しており、Y は勤めから帰ったあと、息子にコンピューターの技術をいろいろ教えてやる。学校での成績も親子ともに重大関心事であり、Mu の学校の成績表は、彼の部屋のベッドの横に、目立つようにはられている。

M・Y 夫妻は学校のカリキュラムにも注意を払っている。彼らも S・D 夫妻同様、子どもたちを私立学校に入れようと考えているが、さしあたってはヴァンクーヴァー市内の公立小学校に入れており、毎日郊外から車で送りこんでいる。彼らの住んでいる

ヴァンクーヴァー郊外にも学校はあるが、そこよりも優秀とみなされている学校である。「公立学校は、勉強よりも課外活動に力を入れすぎている。PTAの会合で、子どもたちのカリキュラムについてよりも、スケートやスキーに行った回数を尋ねられたので失望した」と、公立学校に対して批判的であるのが、一般のエジプト人の傾向である。カナダの公立学校が余りに個人主義的で、各自の勝手な遊びが多く、競争をさせないという点も、よく話題にされることである。

M・Y 夫妻は、息子と娘を、週に一度オルガンのレッスンを受けさせ、室内テニスクラブにも通わせている。S・D 夫妻の息子は、トロントの王立音楽院 (Royal Conservatory of Music) からピアノの5級免状をもらっている。彼らは息子に、12年級まで行かせてやり、大学に在学中に音楽を教えて自分の授業料をかせぎ、生計をたてられるように準備してやりたいと思っているという<sup>22)</sup>。

道徳・宗教教育も、親の責任と考えられている。親は子どもにも宗教教育をほどこし、良いお手本であろうとする。Dはエジプトからカナダに移住して以来、長らく規則正しい礼拝をしていなかったが、子どもがものごころつくようになり、「おかあさんはどうして礼拝しないの」と父親にきいているのを知ったことから、毎日きちんと礼拝するようになったという。

カナダ社会で、一流の職業をもち、業績をあげていくのに、ラマダーン月の1カ月の断食を守ることは、かなりの困難をとまなう。それにもかかわらず断食を実行しているのは、仕事そのものより、ムスリムとしての人生を生きるの方が重要であるとの考え方が強いためであり、その価値観を子どもたちに伝承するため、非イスラーム的環境でも断食ができることを示すことが必要だという。

子どもたちは、できるだけ声を出してコーランを誦み、暗誦することを勧められる。コーランのアラビア語の意味はわからずとも、そらんじてしまうことがよいとされ、子どもたちも、「光の章のはじめの部分は、もう全部言えるよ」と、大人たちの前で得意気にそらんじてみせることもある。Cu, Tr グループのほとんどの家庭には、英語のコーランと、アラビア語のコーランがそなえつけられ、カセットテープに、イスラームについての講義が録音されてあるものを、家庭にもっている者も多い。多くの家庭で、家族の者が家にいるときにはしょっちゅうこのテープをかけて、子どもたちにも聞かせるようにしている。

子どもたちは日常、両親のアルコールに対する対応などを見ており、どのような行

22) カナダでは、大学の授業料、その間の生活費を、学生自身のアルバイトでまかなうのが、ふつうである。

動をとればいかに無意識のうちに身につけていく。親も子どもたちの存在を意識し、良きムスリムとして生活し、模範となろうとする。子どもの教育のために、自分達も子どもたちが生まれる前より宗教的になったという話は、多くのエジプト人が指摘するところである。

### 3) イスラーム学校

ヴァンクーヴァーのエジプト人の子どもたちは、カナダ人一般の普通学校に通っている者が、数の上では多いが、とくに Tr グループの者たちの多くは、リッチモンドの大モスクに設けられているイスラーム学校に子どもを通わせている。

このイスラーム学校は、1984年に、連邦政府の補助金12,000ドルを受けて設立されたものである。その年には、5人の教師と42人の生徒がいたが、そのうち6人がエジプト人ムスリムであった。1985年には10人の教師になり、60人の生徒が入学を許可された。現在57人の子どもが入学許可を待って waiting list に登録されている。そのため、新しい校舎を増設中である。新校舎は、南アフリカ人ムスリムの寄附と、日曜日のヴォランティア労働によって着工されていた<sup>23)</sup>。

教育学の修士号をもつ校長 Sh (パキスタン人) のみが給料を支払われている。残り9人の教師はヴォランティアで教えているが、BCMA から少額の謝礼をもらっている。BCMA は、校長の Sh と、住宅に困っている教師の Na に対して、リッチモンドのモスクに隣接した家屋を提供している。10人の教師のうち、Na, Za, Wa の3人はエジプト人である。校長の Sh とエジプト人 Sa の2人の教師が、2台のスクール

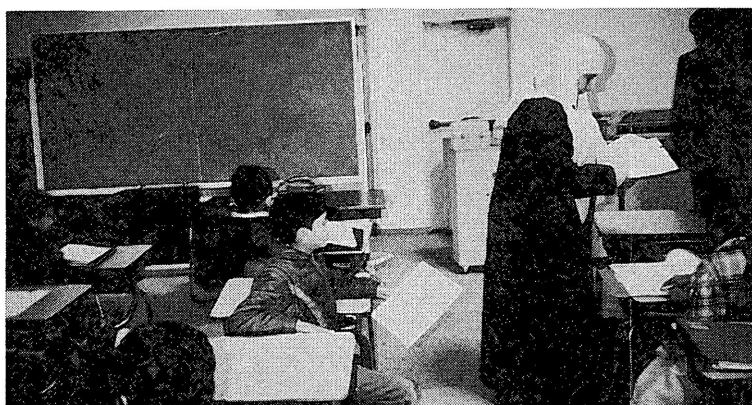


写真6 イスラーム学校の授業風景。女性教師(右、手前)も女生徒たちもイスラーム服である。

23) 1989年7月の追跡調査の際にはほぼ完成していたが、一部未完成で、生徒たちはモスクの中に増設された教室にあふれていた。

バスを運転して生徒を送り迎えしている。ヴァンクーヴァー、サレー、リッチモンドから親に送られてくる子どもたちもいる。授業料は、それぞれの親の経済状況にまかせられている。経営は BCMA からの補助金や個人の寄附金で運営されている。教師の1人 Sa は、クウェートに、この学校への寄附金をつのりに行ったこともある。学校はカナダ政府ブリティッシュ・コロンビア州の補助を受ける資格がまだないため、財政危機に直面しているが、創立後2年たち、カリキュラムのガイドラインを満たせば、ブリティッシュ・コロンビア州の教育省は経費の50%を、5年後には70%を負担してくれることになっている。

授業は、カナダの公立学校と同じく9時から午後3時まで。ただし金曜礼拝のため、金曜日の授業は約2時間早く終わる。月曜日から木曜日までは、毎日55分授業が6講時あり、昼食の時間と礼拝（ズフル、昼すぎの礼拝）があわせて1時間、授業科目は6科目ある。金曜日は4講時、4科目となる。これに対して、ブリティッシュ・コロンビア州の普通の公立小学校は、月曜日から金曜日まで40分授業が9講時、8科目おこなわれている。イスラーム学校も普通学校も、土曜日、日曜日は休日となる。

イスラーム学校は、幼稚園を含めて10学年あり、4年生から10年生までは、数学・理科・英語を週にそれぞれ5講時、アラビア語とコーラン学習を4講時、社会科とフランス語を2講時履修することになっている。数学と理科に力を入れるのは、イスラ

表9 リッチモンドのイスラーム学校の時間割

	月	火	水	木	金
1 教師	フランス語 Ni	英語 La	英語 La	英語 La	フランス語 Ni
2 教師	アラビア語 Za	理科 Na	理科 Na	アラビア語 Za	理科 Na
3 教師	数学 Na	数学 Wa	英語 La	数学 Na	数学 Na
4 教師	社会科 Sa	数学 Wa	社会科 Sa	数学 Wa	英語 La
5 教師	理科 Na	アラビア語 Za	アラビア語 Za	理科 Na	
6 担任	コーラン Za	コーラン Za	コーラン Za	コーラン Za	

上記の時間割は、第4学年度のものを例にとった。  
 担当教師のうち、Za, Wa, Na はエジプト人。Sa はソマリヤ人。  
 La はパキスタン人。Ni はフランス系カナダ人。

ームの伝統であるとされ、授業時間も多くとられている。たとえば、ブリティッシュ・コロンビア州の普通公立小学校では、4年生は週に理科を2時間学べばいいことになっていて、イスラーム学校に比べ、4.5時間少ない。イスラーム学校の理科の内容は、化学、植物学、動物学、地学、天文学である（表9）。

イスラーム学校と普通公立小学校の最も大きな相違点は、アラビア語とコーランの学習のあるなしである。さらに、イスラーム学校の生徒には礼拝の時間が設けられている。また、物理と美術の時間がないことも、普通校と異なっている点である。この2科目は、ブリティッシュ・コロンビア州教育省の指定科目なので、これがないと、将来イスラーム学校が政府からの補助金を受けるときに問題となるかもしれないといわれている。

この学校に通学しているエジプト人ムスリムの子どもは6人である。このうち、2人の女の子は、普通校からイスラーム学校へ転校したいと親に頼んだという。2人は、親の教育により、早くからイスラーム式長袖、長裾の服装にヴェールをかぶっていたので、普通小学校では他の子どもたちと違いすぎて落ちつかなかった。イスラーム学校では、宗教的伝統や、イスラーム的環境の中で勉強することができ、以前のようにカナダ的な基準を押しつけられて肩身のせまい思いをすることがなく、この2人は、イスラーム学校への転校を良かったといっている。

エジプト人ムスリムは誰もが、イスラーム学校を理想的には好ましく思っている。それは、子どもたちがイスラーム的環境の中で教育を受け、それによって自然に宗教的・道徳的な教育を受けると考えているためである。しかし、実際に子どもたちを通わせるとなると、多くの親たちの中にはためらっている者もいる。原則としてはイスラーム学校を支持してはいても、教師たちのうち1人しか教育学の学位をもっていない、訓練を十分につんでいないという点に不安を感じている。また、学校ができたばかりで、卒業生が十分な教育を受け、今後より学問的な研究をすすめたり、よい職についたりすることができるという実績を示していないという点も心配している。さらに彼らが恐れているのは、子どもたちがイスラーム学校から普通学校に上がったとき、勉強面や社交面で不利になりはしないかということである。勉強面では、イスラーム学校には物理・美術の科目がないうえ、授業の質も公立学校の基準に達していないと考えられている。社交面での不利というのは、イスラーム学校のイスラーム的環境の中にばかりいると、子どもたちがこれから入りこみ、適応していかねばならないカナダ社会の主流から孤立するのではないかということである。とくに Cu グループのエジプト人たちは、学校や家庭以外の非イスラーム的環境の中での生活に、子どもたち

が混乱をきたすのではないかと恐れている<sup>24)</sup>。イスラーム教育は親の責任であり、他の者に委任すべきではないという意見をもっている者もある。家庭教育の項でみたように、彼らは、家庭における宗教教育を大事にしており、自分の子どもたちの宗教教育は自分で監督したいと望んでいる。

カナダ社会にかなりうまく適応しているイスマリーイーラーたちは、子どもたちを昼はカナダの世俗的な学校に、夜は宗教学校に通わせている。エジプト人ムスリムもそうすべきだと主張するエジプト人も多い。

## 2. 生活習慣

イスラームは、魂の救済のみを眼目とする宗教というよりは、むしろ生活様式そのものであると言われる。日常生活の中にも、飲酒の禁止や豚肉、ハラール肉の問題など、イスラームの教えが入りこんでいる。本章では、食習慣と飲習慣、結婚や葬儀が、カナダ社会の中で変化しているのかどうか、どのようにおこなわれているのかについて考察する。

### 1) 食習慣

エジプト人ムスリムの食物の好みは、全体的にいつてカナダに移住してからあまり変化していない。カナダに20年近く滞在しているエジプト人ムスリムでも、エジプトやアラブの食物に目を輝かせる姿がみられる。As, Cu, Tr グループを問わず、カナダの食物よりも、エジプトの料理の方が好まれて、エジプト風食習慣がカナダにおいても続いている。変化がみられるのは朝食だけである。セリアルやトーストといったカナダ式の食事をする者が多くなっている。エジプト人が好む伝統的朝食にはフル<sup>25)</sup>が欠かせないが、作るのに時間がかかるので、仕事のある週日の朝食には、間に合わない。とくにエジプト人ムスリム移民には共働きの夫婦が多いので、エジプト風朝食を用意することは、むずかしい。そこで、ふだんは西歐式の朝食をとり、週末には、中東食料品店で手に入れるエジプト風チーズの一種、ギブナ・ルーミーや、オリーブ、ヨーグルトと共に、手をかけて用意されたフルを家族でゆっくりととるのを楽しみにしている。

昼食、夕食はエジプト風である。共働きの夫婦の場合、昼食には家に戻れないので弁当をもっていく。たいてい中東風サンドウィッチで、アイーシとよばれるエジプト

24) *Islamic Horizons* 1986年1月号でも、イスラーム学校の問題について議論され、イスラーム学校に対する反対意見として、北米社会から孤立している、国際的になれない、などが挙げられている。

25) そら豆を煮こんだ典型的エジプト料理。

風パン<sup>26)</sup>にトマトとチーズ、レタスなどをはさんだものである。カナダ風にセロリやにんじんを入れたり、エジプト風ピクルスを入れたりもする。家で昼食をとるときには、ターミーヤ<sup>27)</sup>、クフタ<sup>28)</sup>、マハシ<sup>29)</sup>などのエジプト風料理が用意される。

エジプトでは昼食に重きがおかれ、夕食は軽くすませるのがふつうであるが、ヴェンクヴァーではエジプト式の料理が最もよく出されるのは、夕食である。夕食には、フンムス<sup>30)</sup>とアイシ、ババガヌーシュ<sup>31)</sup>、ターミーヤ、クフタ、マハシ、エジプトのハト料理に似ているといわれるコーンウォール風鶏料理、ロールキャベツ、アレキサンドリア出身者がとくに好むエビ・いわし・にしん・さけなどのシーフード、オクラ<sup>32)</sup>、ズッキーニなどの野菜である。特別な行事のあるときには、もっと手のこんだ料理、たとえばワラカ・アイナブとよばれるぶどうの葉に肉と米をつつんで煮たものや、モロヘヤ<sup>33)</sup>のスープなどが作られる。夕食の最後には、酢づけのとうがらし、オリーブ、ビーツ、アーティーチョーク<sup>34)</sup>などがでる。デザートは、ふだんは出さない。友人を食事に招待したり、NFECs の子ども会など、社交的な集まりのような特別の場合にのみ、バクラヴァ<sup>35)</sup>、シムシミーヤ<sup>36)</sup>、カタイフ<sup>37)</sup>など、アラブ風の甘いものが出される。

エジプト人ムスリムの子どもたちは、カナダ人に人気のあるコンビニエンス・フード、ファーストフードをよく知っているが、両親と同じくエジプト式の料理を好む。彼らは、ホットドッグやハンバーグ、中華料理のチャプスイのようなものも好むけれども、ターミーヤなどのエジプト料理にはかなわないという。子どもたちがエジプト料理を好むのは、両親の積極的な努力もあつてのことである。親たちは、エジプト料理をとくに時間をかけて念入りに調理したり、自分たちエジプト人の食文化は独特のもので、からだにも良いことを教えたりする。子どもたちの好きなエジプト料理をたびたび作って、彼らの好みが続くよう気を配っている。

26) アラブ食料品店で手に入る。

27) 豆その他の野菜を裏ごしにして、団子状に揚げたもの。

28) 羊のひき肉に玉ねぎとパセリをませ、串焼きにしたもの。

29) トマト、ピーマン、なすなどの野菜に米とひき肉を詰めて煮こんだもの。

30) エジプト豆をつぶし、ペースト状にしたもの。

31) なす料理の一種。

32) エジプトから冷凍または生で空輸したもので、北米産のものよりも小さくてとげが少ないので、エジプト人ムスリムに好まれている。

33) エジプト人好みの野菜で、エジプトから輸入している。冷凍のものはジャックの店、生のはメイストリートのフィリピン人の店で売っている。

34) これも、エジプトから輸入したものが好まれている。

35) ピスタチオとパイ皮を交互にかさね合せ、砂糖汁または蜂蜜をかけた菓子。

36) ゴマを固めた菓子。

37) ドーナツ風の揚げ菓子。

エジプト料理そのものと、それへの嗜好は変わっていないが、食事のとりかたは、カナダ人化している面もみられる。たとえば、エジプトでは朝食のメニューであるフルヤ、庶民の粗末な食事の代表例であるターミーヤを、ごちそうとして昼食や夕食に食べるようになってきていること、英仏系カナダ人がよくやるように、もちよりパーティーをすることである。エジプトでは、親しい間がらでも、ごちそうの足しをもっていくのは侮辱になるが、ヴァンクーヴァーでは、モスクの集りでも、もちよりパーティーがおこなわれている。

食事の時間に関しても、カナダの習慣に大きく影響を受けている。平日の朝食がカナダ式なのは、好みからではなく時間がゆっくりとれないからである。昼食もエジプトでは午後2時頃とるのがふつうだが、カナダでは11時半から1時半ぐらいの間に食事をしなければならない。夕食もエジプトにいた時よりかなり早くとるようになっていく。

エジプト料理には、調理に時間のかかるものが多いので、前もって作り、冷凍しておくことが、エジプト人の間ではなされている。とくに共働きの女性たちは、一週間分の夕食を日曜の午後にごくおくのを習慣にしている人が多い。フードプロセサーは、エジプト料理を作るため、材料を砕いたり混ぜたりするのに役立つ器具として、カナダのエジプト女性の間でよく用いられている。この頃は、ほとんどの家の台所にあるが、ときに互いに貸し借りをすることもある。

食事に関して As, Cu, Tr グループの違いがあらわれるのは、豚肉とハラール肉<sup>38)</sup>の問題についてである。筆者の調査によれば、ヴァンクーヴァーのエジプト人ムスリムの中で、豚肉を食べる者は皆無に近い。As グループの者は、うっかりして食べたものはハラーム（禁じられたもの）にならないという。しかし、この As グループの人たちでも、わかっている豚肉を食べる者はほとんどいない。彼らは宗教的理由で食べないというよりは、小さいときから食べていないので、豚肉はあまり好きになれないらしい。ほとんどのエジプト人ムスリムは、ソーセージなどの雑肉の製品を食べるときには、豚肉がまじっていないかどうか、成分を注意深くチェックする。子どもたちも、豚肉を食べてはいけないことを自覚している。友人の家を訪問するときには、友人の親に自分たちが豚肉を食べないことを伝えておく。

イスラームにおいて豚肉が禁じられていることはカナダのエジプト人たちも、まわりの人たちも、認識しており、このタブーを守るのは、さして困難ではない。しかし豚肉以外のハラール肉の問題は微妙であり、イスラーム的環境の中におけるムスリム

38) [片倉 1988a: 716] 註43参照。



の対処の仕方を、注目しておかねばならない。

ハラール肉を販売している店は、ヴァンクーヴァーには3軒、サレーに1軒ある(図1参照)。これらの店の所有者はパキスタン人ムスリムで、屠殺場の所有者から屠殺権を買とり、イスラームのおきてにのっとった儀式をおこなった上で屠殺をおこなっている。エジプト人ムスリムの多くは、これらの店から肉を買うようにつとめている。しかし、パキスタン人は清潔でないという偏見の上に、これらの店で買った肉はまずいことが多く、値段も高くなるため、買うのを躊躇するエジプト人が多い。彼らは、ハラールのことを気にしつつ、実際の日常生活は、ハラール食肉店以外の肉屋から肉を買っていることもあるのが実情である。その行為を正当化するため、また、良きムスリムとして、ハラールでない肉を食べているとは認めたくないため、「ハラール」の解釈をゆるやかなものにしようとしている。そのような解釈の典型的例は、動物を屠殺したのが、ムスリムと同じアハル・ル・キターブ、すなわちユダヤ人、クリスチャンであるなら、その肉はハラールだとするものである。彼らは通婚も許されている啓典の民で、一神教徒であるのだから、まちがった神にささげられているものではないと解釈するのである。Cuグループのエジプト人たちは、いつのころからか、ウッドワース店<sup>39)</sup>で売られている肉は、ハラールだと信じこんでいる。リッチモンドの大モスクのイマームが、ウッドワースの店で売られている肉は、適切な屠殺方法がとられていると公表したというのである。ほんとうにハラールであるかどうかには疑問をもっている者もいるようであるが、このうわさを信じておきたいという心理が、多分に働いていると観察された。肉を買いに行くのは、パキスタン人のハラール肉店でなければ、ウッドワース店で買うのだということで、一応の安堵感をもっているのである。しかし、Trグループの人たちは、イマームがウッドワースの肉について肯定的に言及したということを否定し、ハラール肉の店で肉を買うべきであると主張する。

ハラール肉については、Asグループは関心が薄く、気にかけるのに値しない問題だという者もいる。Cuグループは、たてまえとしてはハラール肉を食べているのだとするが、厳密にはハラールでないものを食べていることを内心認めている。Trグループは、この問題に強い関心をもち、厳格な解釈をする、と概括できる。

ハラール食肉店のほかに、エジプト人ムスリムがしばしば利用する店に、ヴァンクーヴァー東部にある“Middle East”、通称「ジャックの店」がある。ヨルダン人のクリスチャンが経営している食料品および雑貨店である。エジプト人ムスリムやその他

39) 広い販売網をもつ、チェインストアの食料品雑貨店。



写真7 中東出身者たちがよく利用するジャックの店

のアラブ、およびギリシア人、ユダヤ人が大勢やってくる。この店では、食用のぶどうの葉やそら豆のかんづめなど、カナダでは手に入れにくい中東地域やギリシアの食品ばかりでなく、洗面所用のイブリーク<sup>40</sup>)にいたるまで、幅ひろく扱っている。アラビア語の新聞・雑誌は、3日程度の遅れで手に入る。エジプト映画のビデオレンタルサービスも人気がある。

「ジャックの店」は、エジプト本国の店と雰囲気似ているため、利用するエジプト人が多い。ヴァンクーヴァーのエジプト人ムスリムが、As, Cu, Tr グループを問わず、最もよく出あう場所である。

その他にエジプト人がよく利用しているのは、ヴァンクーヴァーの目抜き通り近く

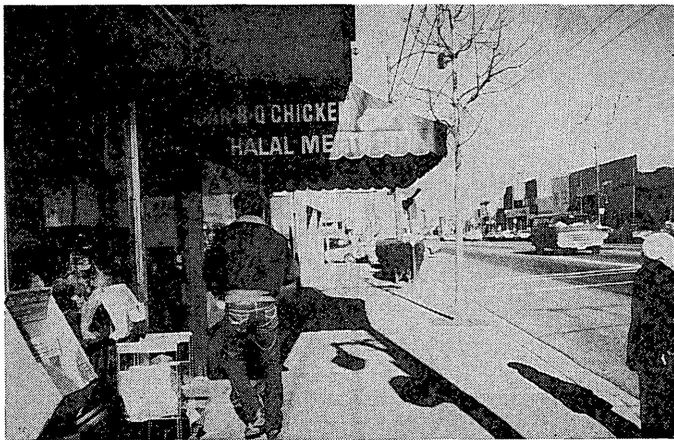


写真8 ハラール食肉店

40) 排便のあと、水洗するための水を入れておくピッチ。

にあるフィリピン人の食料品店、パレスチナ人夫妻の店（King Edward の店）などで、中東からの輸入品である冷凍のオクラや、カイロから空輸しているモロヘアなどが手に入る。こういった中東あるいはエジプト特有の食品を求めるばかりでなく、一般のカナダ人がよくいく、青空市場風で品物の豊富なグランヴィル・アイランドのマーケットや、セイフウェイのスーパーマーケットも、エジプト人たちが日常の食生活のために、よく利用している。カナダ人と同じ材料を買ってきても、多くはエジプト風料理に細工して食べることは、先に述べた通りである。

ヴァンクーヴァーには、レバノン人経営のレストランが2軒あり、中東料理を出している。しかしエジプト人ムスリムはほとんど利用しない。同じアラブ料理でも、レバノン料理がエジプト料理とかなり異なることもあるが、一般に、外食は好まれないことがその理由である。とくに、ナセル時代以前にエジプトで育ったエジプト人たちは、家族との食事は自宅でするものというアラブの伝統的習慣を身につけている。客を外のレストランに招くことは、失礼とされている。カナダ社会の影響をうけて、外のレストランで食事をすることもあるが、そういう時は、自宅では作れないアラブ料理以外のものを選ぶことが多い。

## 2) 飲習慣

飲物も、エジプトにいた時と同様に、カナダにおいても、伝統的なものが好まれている。最もよく飲まれるのは紅茶である。エジプトでは、紅茶を飲むには、必ず透明の小さなガラスコップが使われるが、このガラスコップは、ヴァンクーヴァーでは入手し難いこともあり、カナダ人の影響もあり、ふつうの紅茶茶碗で、飲まれている。紅茶に似たカルカディの葉もよく用いられる。この葉は、ヴァンクーヴァーではダロウェイ・スパイス店で販売している。植物の根から作るアルクは、ラマダーンのときの飲物で、ジャックの店で売っている。エジプトでは昔から、お産をすませた女性が、飲むことになっている。ヴァンクーヴァーでは、男性も女性も、疲労回復のために飲む。ムガーツは、ごまの実と根を、薄黄色の粉末にしたものを、砂糖で甘くして飲むものである。ジャックの店に粉末状のものが売られているが、エジプトへ行った人が、必ずと言っていいほどおみやげとしてもって帰ってくる。

紅茶に次いで、よく飲まれるのは、エジプト本国でと同様に、トルコ・コーヒーである。トルコ・コーヒーを作るための金属製の器は、ジャックの店でも売っており、たいていの家庭の台所には、そなえつけられてある。エジプト人同士の集りでは、紅茶、コーヒーの順でもてなされるのが、つねである。

筆者が調査したヴァンクーヴァーのエジプト人のうち、Cu グループ、Tr グループ

の者は、アルコールをほとんど口にしない。NF ECS のメンバーは、オークリッジ・コミュニティ・センターで、週1回、夕方からバレーボールなどのスポーツの集いをしているが、他のカナダ人のように、ビールなどのアルコール類はまったくもちこまない。飲みものは、オレンジジュースだけである。エジプト人グループは酒を飲んで乱れないから模範的だと、センターの管理人たちのエジプト人に対する評価は高い。スポーツのあと、誰かのうちで小さなパーティーをすることもあるが、ここでも紅茶、コココーラ、カナダドライ、甘いお菓子類、ぶどうや桃などの果物が出されるだけで、ビール類は一切みられない。筆者の家にエジプト人たちを招いた折、7月の暑いときにはビールを出して、「ここはカナダだし、暑い日にはおいしいよ」と、かなり強くすすめてみたが、だれも飲もうとはしなかった。Cu グループ、Tr グループのエジプト人たちの、さまざまな会合に何回か出席したが、一度も酒を飲んでいる姿に出くわさなかった。As グループと Cu グループが同席した際には、As グループがアルコールを飲んでいても、Cu グループの人たちはオレンジジュースだけで楽しんでた。非ムスリムの人々と同席したときも、飲酒している人々を目の前にしつつ、ソフトドリンクだけですませていた。

エジプトはじめ、ムスリムがマジョリティのところには飲酒していたエジプト人ムスリムで、カナダに来てから禁酒しはじめた人や、カナダに来てから飲みはじめたが、現在は飲んでいないという人たちが、意外に多く存在する。

たとえば、

T：建築家。かなり厳しい禁酒国のクウェートにいた15年間は、ひそかに飲んでた。しかしカナダに来てから禁酒した。

A：大学附属研究所研究員。カナダに来てから禁酒した。ワインが好きだった。エジプトにいる時から宗教的なためらいを感じていたが、カナダに移民して以来ぶつりやめた。

M：カナダの大学に在学中、周囲の peer pressure のために飲みはじめた。禁酒したのは、宗教的な理由からではなく、酔っているときの自分や他の人々のふるまいが嫌だったからである。アルコールが好みにあわないのと、成長して peer pressure に抵抗できるようになったため、禁酒を続けている。

A.N.：カナダへ来てからも飲んでた。今でも、酒の味はすきだが、赤ん坊だった子どもたちが大きくなったので、父親として良い手本になれるよう、禁酒しはじめた。

飲酒を肯定するカナダの社会的環境の故に飲酒しはじめた者は、As グループの一

部を除いてほとんどいないという。むしろ、カナダに来てから、自己のアイデンティティ確立の過程で、禁酒をはじめた者の方が多いといわれる。

As グループの者は、カナダに来る前から飲酒をしていた者が大部分であるが、なかには、カナダ社会に同化しようとして、英仏系カナダ人とのつき合い、飲酒しはじめた者もいる。

女性で飲酒しているのは、As グループの1人だけである。

M: 23才。1984年にヴァンクーヴァーにやってきた。ここで勉強している兄弟の友人と結婚したが、3カ月後に夫を残して英仏系カナダ人の恋人と同棲しはじめた。ヴァンクーヴァーのエジプト人ムスリム女性の中では、平均よりも教育程度が高い。他のエジプト人ムスリムとつき合っていない。彼女の友人は、英語のクラスで知り合った、エジプト人以外のさまざまな文化背景をもつ人々である。彼女は自分のことをムスリムだとはいうが、自分でも信心深いとは思っていない。しかし、自分の飲酒は適度なもので、この程度は許されるのだと主張している。同棲していた英仏系カナダ人とは、酒を飲みすぎるという理由で別れた。

Mの場合、アルコールを好んでいるというよりも、カナダの社会に同化し、カナダ人と同じ行動をしようとして飲酒していると観察される。彼女は自己主張が強く、カナダ社会で成功したいと強く望んでいる。

ムスリム女性の飲酒例が少ないのには、いくつかの理由がある。

まず、飲酒は男性のすることというイメージが、カナダ社会全般にあるので、女性はあまりプレッシャーをうけなくてすむ。カナダのエジプト人ムスリム・コミュニティは、女性の飲酒に対しては、とくに厳しいということもある。さらに、ムスリム女性は母として、子どものお手本となるため、良きムスリムでなければならないという社会的圧力が存在する。

ヴァンクーヴァーのエジプト人ムスリムは、非ムスリムのカナダ人が、社交的な集りでアルコールを重視することに、否定的ではあるけれども、非ムスリムの飲酒に対しては、柔軟な姿勢を示す。1985年11月の、NFECs のディナー・パーティーでは、非ムスリムの客のためにバーを用意するかどうかで論争があった。結局、客はアルコールの注文をすることはできるが、バーは設置しないという妥協案が可決された。非ムスリム、ムスリムを問わず、飲酒している者がすぐそばにいても、面と向ってそれをただすというようなことは、全くしない。禁酒は、神に向って守るもので、人々が互いにけんせいし合う性質のものではないというのである。

アルコールに対する反対は、宗教的な面だけでなく、世俗的な配慮にも根ざしてい

る。アルコールは、人々の行動を変えてしまい、その人の本当の性格を知ることができなくなると考えられている。社交上の集りにおいてアルコールは、友人つき合いの楽しみ、代用品にすぎない。エジプト人ムスリムは、アルコールの助けをかりずに、仲間同士の社交を楽しむことができるのだという。

### 3) 結婚

ムスリムの結婚には、「契約」の意識が強いこと、男性から女性にマフル（結婚納金）を支払うこと、ムスリム女性はムスリム以外の男性と結婚できないことなど、いくつかの特徴がある<sup>41)</sup>。カナダに移住してきたムスリムは、結婚について本国とまったく同じやり方、考え方を保持していくことは困難であり、カナダの制度や習慣に合わせて、多少は変えていかざるを得ない面もあるが、基本的には、イスラーム式のやり方でとりおこなっている。

カナダでの結婚の際には、まず、Death and Marriage Registration Office で、結婚許可証 (marriage licence) を申請せねばならない。コンピュータによって、重婚でないかなどが調べられ、許可証が出される。これには結婚当事者双方の年齢、名前、住所、結婚歴などが書きこまれている。有効期限は3カ月である(図3)。

カナダ政府よりのこの結婚許可証がととのえられた段階で、英語とアラビア語で書きこまれた図4のようなイスラーム式の結婚契約書が、マーズーン(結婚登録人)によって用意される(図4)。これには、エジプト本国でと同様に、結婚する男女2人のほかに、2人の証人のサインが必要とされる。マフルの額も、契約書に記入される。エジプトなど、中東では結婚時と離婚時に分けて、きちんと金額が書き入れられるが、カナダでは、what they have agreed upon とのみ書くことが多い。また、カナダでは、金銭の代わりに、カナダ風に指輪、宝石にしたり、マフルそのものをやめてしまうこともある。

ヴァンクーヴァーには、5人のマーズーンがいる。全員エジプト人のスンニー・ムスリムであるが、イスマーイーリー、パキスタン人、イランのシーア派ムスリムたちの結婚式にもマーズーンとしてよばれる。エジプト人は、リッチモンドのモスクを牛耳っているフィジー人とは、必ずしも折り合いがよくないが、結婚式の折には、エジプト人マーズーンがフィジー人によばれる。マーズーンはヴォランティアでやっている仕事で、金持からも貧乏人からも、謝礼金をとらないことになっているが、祝儀のような形で、礼がなされることもある。

41) エジプト人の結婚の詳細については[大塚 1985: 273-307] 参照。

Form 2



Province of British Columbia

Ministry of Health  
DIVISION OF VITAL STATISTICS

REGISTRATION OF

**MARRIAGE**

Registration No.  
(Department Use only)

THIS IS A PERMANENT LEGAL RECORD - TYPE OR WRITE PLAINLY - COMPLETE ALL ITEMS  
DO NOT USE RED OR GREEN INK  
(See reverse for legal requirements under the Vital Statistics Act)

<b>PLACE OF MARRIAGE</b>	1. Name of church or address where marriage was solemnized								
	City, town or other place (by name)		Inside municipal limits? (State Yes or No)						
<b>DATE OF MARRIAGE</b>	2. Month (by name), day, year of marriage	3. Licence No. (If banns only, specify)	4. If Civil Marriage Receipt No.						
<b>NAME</b>	<b>BRIDEGROOM</b>		<b>BRIDE</b>						
	5. Surname of bridegroom (print or type)  All given names in full		16. Surname of bride (prior to this marriage) (print or type)  All given names in full						
<b>MARRIAGE STATUS</b>	6. Bachelor, widowed, or divorced (specify)		17. Spinster, widowed, or divorced (specify)						
<b>RELIGION</b>	7. Religious denomination		18. Religious denomination						
<b>BIRTH DATE</b>	8. Month (by name), day, year of birth	9. AGE	19. Month (by name), day, year of birth 20. AGE						
<b>BIRTH PLACE</b>	10. City, town or other place, province (or country) of birth		21. City, town or other place, province (or country) of birth						
<b>ADDRESS (See reverse)</b>	11. Complete street address. If rural give exact location  City, town or other place, county, province (or country) Postal Code		22. Complete street address. If rural give exact location  City, town or other place, county, province (or country) Postal Code						
<b>FATHER</b>	12. Surname and given names of father (print or type)		23. Surname and given names of father (print or type)						
<b>MOTHER</b>	13. BIRTHPLACE - City, town or place, province (or country)		24. BIRTHPLACE - City, town or place, province (or country)						
<b>SIGNATURES</b>	14. Maiden surname and given names of mother (print or type)		25. Maiden surname and given names of mother (print or type)						
<b>OFFICIAL</b>	15. BIRTHPLACE - City, town or place, province (or country)		26. BIRTHPLACE - City, town or place, province (or country)						
<b>UNIT</b>	27. Signature of bridegroom <input checked="" type="checkbox"/>		28. Signature of bride <input checked="" type="checkbox"/>						
29. Signature of witness <input checked="" type="checkbox"/>		Address							
30. Signature of witness <input checked="" type="checkbox"/>		Address							
<b>BRIDE'S SURNAME ELECTION (if applicable)</b> 31. Under the provisions of the Name Act, Chap. 295, Section 3(2) of the Revised Statutes of British Columbia, I hereby elect not to assume the surname of the bridegroom, but to retain my surname of _____ after this marriage. Signature <input checked="" type="checkbox"/>									
32. I certify that I solemnized the marriage of the parties named in items 5 and 16 at the place and on the date stated above: <table style="width: 100%; border: none;"> <tr> <td style="width: 60%; border: none;"><input checked="" type="checkbox"/> Signature of person officiating:</td> <td style="width: 40%; border: none;">Address:</td> </tr> <tr> <td style="border: none;"><input checked="" type="checkbox"/> Name of person officiating: (Print or type)</td> <td style="border: none;"></td> </tr> </table>				<input checked="" type="checkbox"/> Signature of person officiating:	Address:	<input checked="" type="checkbox"/> Name of person officiating: (Print or type)			
<input checked="" type="checkbox"/> Signature of person officiating:	Address:								
<input checked="" type="checkbox"/> Name of person officiating: (Print or type)									
33. Religious denomination (if clergyman)		Marriage Act Certificate No.	Date signed: Month (by name), day, year						
<b>DO NOT WRITE BELOW THIS LINE - OFFICE USE ONLY</b>									
Notations:									
<table style="width: 100%; border: none;"> <tr> <td style="width: 15%; border: none;"><b>CERTIFICATION OF DISTRICT REGISTRAR</b></td> <td style="width: 65%; border: none;">I certify this return was accepted by me on this date at - District Registration No. _____</td> <td style="width: 20%; border: none;">Date: Month (by name), day, year</td> </tr> <tr> <td style="border: none;"></td> <td style="border: none;"></td> <td style="border: none;">Signature of District Registrar</td> </tr> </table>				<b>CERTIFICATION OF DISTRICT REGISTRAR</b>	I certify this return was accepted by me on this date at - District Registration No. _____	Date: Month (by name), day, year			Signature of District Registrar
<b>CERTIFICATION OF DISTRICT REGISTRAR</b>	I certify this return was accepted by me on this date at - District Registration No. _____	Date: Month (by name), day, year							
		Signature of District Registrar							

8-2300-51.1: 9-2-83

図3 カナダ政府健康省へ提出する結婚登録用紙

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ

# Islamic Marriage Certificate

شهادة عقد نكاح

Ye human beings you should fear your Lord Who created you from one soul and from it created its mate, and from them gave birth to many men and women.  
 And fear Allah who shaped you in the wombs and He has been watchful over you. O ye who believe fear Allah to the right extent as it behoves you to fear Him, and you should be genuine.

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ  
 يَا أَيُّهَا النَّاسُ اتَّقُوا اللَّهَ الَّذِي تَعْبُدُونَ إِنَّهُ يَخْلُقُ مَا يَشَاءُ وَيَخْتَارُ  
 وَمِمَّا يَخْلُقُ مِنْكُمْ ذَكَرَ وَإِمْرًا مِنْكُمْ نِسَاءً وَاتَّقُوا اللَّهَ الَّذِي تَعْبُدُونَ  
 فَكَانَ بِكُمْ وَاعٍ يَخْلُقُ مَا يَشَاءُ وَيَخْتَارُ

---

الزوج

Bride groom \_\_\_\_\_

*Married to* تزوج من

---

الزوجه

Bride \_\_\_\_\_

على كتاب الله وسنة رسوله  
 According to the Quranic Law and Sunnah of Mohammed  
 (P. B. U. H.)

Mahr \_\_\_\_\_

At \_\_\_\_\_ in \_\_\_\_\_

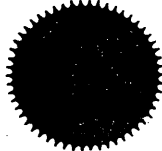
On the \_\_\_\_\_ day of \_\_\_\_\_ AH

الزوج \_\_\_\_\_  
 Bride groom \_\_\_\_\_ Bride \_\_\_\_\_

Witness: (1) \_\_\_\_\_  
 (2) \_\_\_\_\_

---

Officiating Imam \_\_\_\_\_ License Number \_\_\_\_\_



000041

図4 イスラームによる結婚証明書



カナダに来てから結婚した者の中には、エジプトに一時帰国した際に、相手を見つめようとする者もいる。その一例に、最近、休暇でエジプトに帰国したときに、家族のアレンジで4人の女性に会い、そのうちの1人と婚約したA.S.がいる。彼によれば、「ほんとうはカナダの女性と結婚したかったが、宗教的な相違のために困難なのであきらめた。イスラームでは、結婚することは義務なので、イスラームへのコミットメントをはたすために結婚することにした」という。

カナダで結婚相手を見つけたエジプト人ムスリムには、友人の紹介や、パーティで知り合ったという者が多い。雑誌の広告欄に、「ムスリム女性を求む」「ムスリム男性を求む」というような広告をのせる者もいる<sup>42)</sup>。しかし、エジプト人ムスリムの中で、相手が単にムスリムであればよいと考えている者は、Trグループにおいても少数派で、大部分はエジプト人ムスリムと縁組みしたいと考えている。そのため、選択範囲はせばまり、カナダでは将来の結婚相手が心配だから、カイロに帰るつもりだという者も多い。

#### 4) 葬儀

カナダのエジプト人ムスリムが直面しはじめている問題のひとつは、死去によって起きる葬儀の問題である。ヴァンクーヴァーのエジプト人ムスリムの年齢は、比較的若いので、自然死による葬儀の問題はまださしせまったものではなかったが、1983年に60才の女性が亡くなったことに端を発してクローズアップされてきた。彼女は、カナダに移民した娘の家族と住むために1981年にエジプトからヴァンクーヴァーへやってきて、2年ほど暮したが、なれない環境の中で病気になり、ついに死亡した。

死者が出た場合、遺体をエジプトに送り返して埋葬するか、カナダで埋葬するかが問題になるが、エジプトへ送るのは費用が高つくため、多くのエジプト人にとっては困難である<sup>43)</sup>。ムスリム用の墓地がなかったため、ムスリムのカナダでの埋葬は、死者の顔をメッカに向けて寝かせ、土葬するというイスラームの埋葬方法が、かつてはとれなかった。しかし、ブリティッシュ・コロンビア州では、1976年以来、ムスリム用の墓地が確保され、イスラーム式に埋葬されるよう、BCMAによってとりはかられるようになった(図5)。

死者が出ると、BCMAに所属する埋葬責任者(burial officer)またはBCMAの役員に連絡をとる。これらの埋葬責任者たちがいない時には、コーランの知識が豊富な

42) これについては[片倉 1988a: 719, 註44] 参照。

43) 1985年には、サウディアラビア人とヨルダン人各々1名の遺体が、本国の親族のもとに送られた。

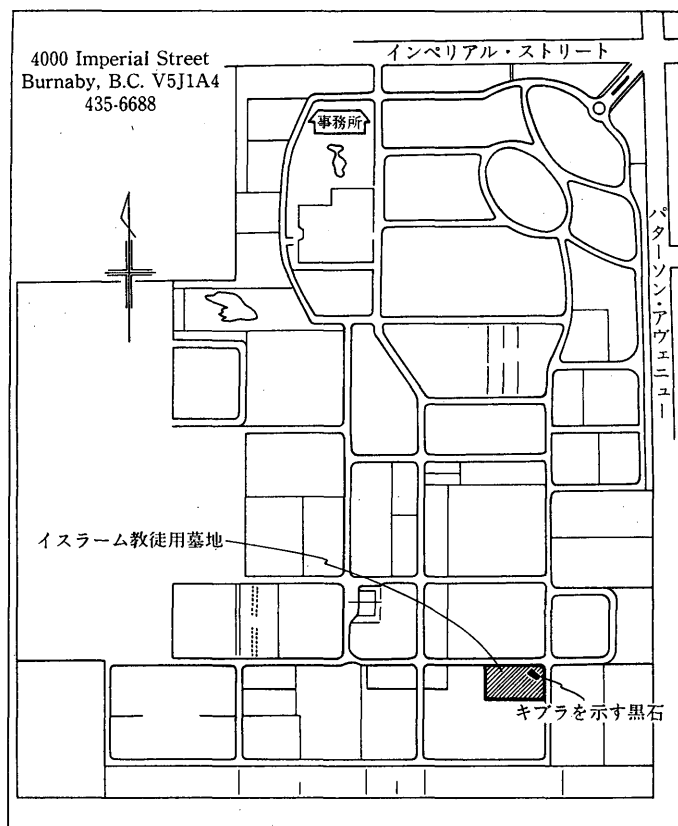


図5 オーシャン・ビュー・メモリアル・パーク  
イスラーム教徒用墓地所在地

者、たとえばモスクのイスラーム学校教師であるエジプト人 Na などが代行することもある。連絡を受けたこれらの人は死者のためにコーランの文句を唱え、遺体がイスラームのきまりに従って埋葬されるように手続きをする。

その後、死者の親族や友人が遺体をリッチモンドのモスクに運ぶ。ここには、遺体洗浄所がある。エジプト本国でと同様に、男の遺体は男の手で、女の遺体は女の手で、水をもって洗い清められる。胃と腸は中味が全部押し出され、洗浄される。体の開口部分全部に樟脳油を吸いこませた綿がつめられる。そののち、遺体は白い綿布で包まれる。このとき、白い綿布の代りに死者が生前、巡礼に使った白い貫頭衣風のアラビア衣裳（イスラームと呼ばれる）を用いることもある。遺体を包むこの布にも樟脳油がふりかけられる。続いて、死者のために神に許しをもとめる祈禱がおこなわれる。死者が男の場合は腹のところに、女の場合は肩、すなわち乳房の見えない位置にイマ



写真9 オーシャン・ビュー・メモリアル・パークの入口

ームが立ち、死者を神のもとに返させてくれるようコーランの文句を唱える。その後、遺体は棺に納められて墓地へ移される。

墓地では、地中に穴を掘り、遺体を棺から出してここに入れ、右腹を下にして顔をキブラ（ムスリムが礼拝の際に向かう方向、すなわちメッカのカーバ聖殿の方角をさす）の方へ向けて入れる。胸のところにコーランを置くこともある。墓地には、キブラの方向がわかるように、BCMAと書かれた黒石がメッカの方向に向けて置かれている。そのまま放置すると、遺体があおむけになるので、背中側に石などを置き、それを防ぐ。次の埋葬の際には、1人分あけた横に順次遺体を埋めていく。最も新しく埋葬された場所のすぐ横を掘るのを、しばらくの間は控えておくためである。

埋葬までにかかる費用は、埋葬許可書が3ドル、モスクでの葬儀とBCMAの墓地

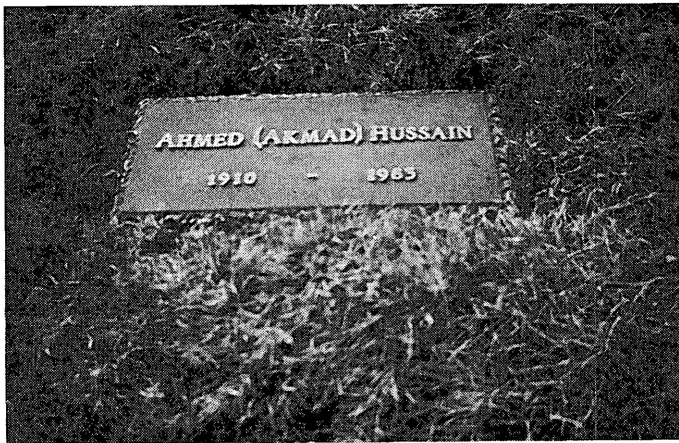


写真10 イスラーム教徒の墓石。花なども供えず、かざり気のないのが特徴である

使用料などすべてを含めて、600ドル（1986年現在）であるが、貧しい人はその限りではない。カナダでのクリスチャンを含むふつうの葬儀料は、平均4,000ドルほどであるから、ここでのムスリムの葬儀は、非常に簡素であるといえる。

BCMA は、1970年代に入ってムスリム墓地の購入計画をはじめ、ヴァンクーヴァーの東方、バーナビーにあるオーシャン・ビュー・メモリアル・パークに、ムスリムのための墓地区画を購入した。1976年に最初に購入した200区は25,200ドルであった。1977年には13,000ドルで104区を、1981年には28,200ドルで200区、1983年には5,313ドルで33区を買い足した。1985年には263区を購入し、これで合計800区画のムスリム墓地が確保された。この費用をカバーする基金は、ブリティッシュ・コロンビア州在住のムスリムたちからの寄附により、まかなわれた。BCMA では、墓地の基金のために寄附をした家族の名簿を記録保存しており、彼らを「墓地を優先的に使用する権利を持つ人々」としている。ただし、ムスリムであれば、この墓地を使用するのを拒否するものではないとも記されている。BCMA のこのような活動は、大きい事業を自分たちだけではやれない少数ムスリム、エジプト人のコミュニティにも安心感を与えるにいたっている。

筆者のインフォーマントの中でも、M・Y 夫妻など大多数が積極的にブリティッシュ・コロンビア州のこのムスリム墓地を利用することを考えているが、Mの妹のように、自分の遺体はどうしてもエジプトへ送ってほしいと言っている者もないわけではない。

## V. 価値観の変化と不変化

### 1. イスラーム的行動および意識

ムスリムには、イスラームを信仰する者としてなさなければならない5つの行為（イバーダート）があるが、ムスリムがマジョリティであるエジプト本国とは異なった環境の中で、これらは、守られているのだろうか。あるいは、守られていないのだろうか。カナダでは、本国にはなかったクリスマスやイースター、ハロウィーンなどのキリスト教徒の祭日が、社会の中で大きな位置を占めている。これらに対してヴァンクーヴァーのムスリムたちはどのように対応しているのだろうか。非イスラーム的環境の中にあって、イスラームに対する意識に変化は出ていないのだろうか。ここではイバーダートのうちの断食、礼拝、巡礼、喜捨と、クリスマスに対する対応の面から、それらをさぐってみたい。

## 1) 断食

ラマダーン月の断食<sup>44)</sup>は、5つのイバーダートの中で、重要なものであるが、ムスリムがマイノリティであるカナダ社会でおこなうのはきわめて困難であるようにみえる。

エジプト本国とは異なり、カナダでは、周囲にいるムスリムでない人々が、ふつうの食生活をおこなっている。とくに、子どもたちは学校で集団生活を送っているため、昼食の時間に自分だけ食べないでいる、ということがむずかしい。第2に、カナダは緯度が高いため、1985年のラマダーン月は、日没が午後9時半頃に当たっており、断食解除の開始が非常に遅い。1986年5月28日付のヴァンクーヴァーの新聞 *The Vancouver Sun* には、「当地の長い1日が、ブリティッシュ・コロンビア州のムスリムの神聖な断食をひきのぼしている」と題して、カナダで断食をおこなうムスリムの苦勞を報じている。中東地域では、日の出から日没まで14時間ほどの断食ですむのが、3時45分頃が夜明け、9時頃が日没のヴァンクーヴァーでは、約18時間と、4時間近くも長くおこなわなければならない [*The Vancouver Sun* 1986: B1, 3]。それに加えて、カナダでの一般的生活は、当然ながらムスリムの生活にあわせて立てられていない。エジプト（とくにカイロ）では、ラマダーン月には仕事時間は短縮され、通常午前7時半には始まり、午後2時に終わることになっている。もちろん、カナダでは、ムスリムに対するこのような配慮はまったく存在しない。ムスリムが断食をおこなうことを知らない者さえいる。ラマダーン月の特別措置に関する要求が、アラブムスリムからカナダ政府に提出されているが、何らの返答も与えられていない。*The Vancouver Sun* 紙には、「仕事の同僚からの理解が最も必要とされているが、それは北米のムスリムにおいてははまだ望むべくもない。」と報じている [*The Vancouver Sun* 1986: B3]。

しかし、1984年、85年のラマダーン月におけるヴァンクーヴァーでの筆者の調査では、60～65%のエジプト人ムスリムが断食をおこなっていた（うち As グループ5%、Cu グループ70%、Tr グループ100%）。共働きで、建築技師の仕事をもつ女性 Na は、通常通り仕事をするとうるが、多少、スローダウンしながらやり出せばできるという。ラマダーン月には、昼間、食事を断ち日没時に食事をするわけだが、彼女はラマ

44) ラマダーン月の新月の日から、次の新月の日まで、日の出から日没までいっさいの食を断つ。水一滴飲むことも許されない。ただし、日没の飲食はさしつかえない。ブリティッシュ・コロンビア州では、サウディアラビアで新月が観測されたと ARABSAT 通信衛星が告げた日（1986年には5月9日）から断食するムスリムもいるが、ほとんどのムスリムは、自分たちの住む地域で新月の見える日（1986年には5月10日）から始める。

ダーン月の2ヶ月前から、昼食はほとんど食べないようにし、早めの夕食をエジプト風の昼食のようにゆっくりと食べることにして、ラマダーン月の急な変化にそなえている。エジプト人男性医師Aは、健康な者にとって断食は身体のためにも良いと主張している。

断食をやってみたものの、空腹が仕事（コンピュータ・プログラミング）に悪影響をおよぼしたため、途中でやめてしまった者もある（M.Z.）。それでも12日間はおこなったという。一方、Aのように、10年間断食をしなかったのに、去年から再開したという者もある。その理由は、子どもたちにムスリムとしての良い手本を示すためだという。

エジプト人ムスリムの子どもたちは、自発的に断食をはじめめる者が多い。断食できるようになったということは、大人に近づいたひとつの証拠であり、子どもたちがそれを誇りに思う例は、中東における調査でも明らかであった。同様の現象がカナダでも見られる。たとえば、肝臓を悪くしたため、1985年に断食をしなかった女性 Za は、14才の息子にも、学校の勉強や宿題があるし、からだの発育に良くないから、断食はしなくてよいといったが、それにもかかわらずその少年は断食をおこなった。また、M・Y夫妻の息子で11才になる Mu は、1985年のラマダーン月には5日間だけ断食をしたが、その他の月に少しずつ日数を分けて、断食できなかった日数のうめ合わせをしていると語った。学校のない土曜日や日曜日に断食をして、ラマダーン月1月分に充当させることを実際におこなっていた。Mu は1984年にも、ラマダーン月には半分の日数だけ断食したという。

ラマダーン月が終わると、断食明けの祭り（イード・ル・フィトル）が3日間おこなわれる。ヴァンクーヴァーのエジプト人ムスリムは、この間休暇をとる者が多い。中東やエジプト本国でと同様、ムスリム同士が集まり、ディナーなどを楽しむのであ

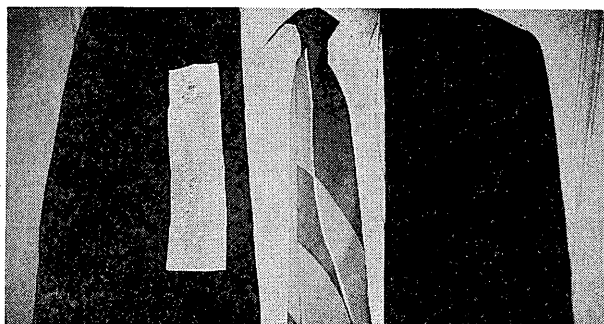


写真11 「Eid Mubarak」と書かれたカードを背広の胸にさげて断食明けの礼拝に行く

る。ふだんはモスクに行かない Cu グループの者たちも、イードの礼拝には出かけていくので、リッチモンドの大モスクのまわりは、ムスリムたちで大混乱を呈し、2キロほど前に駐車して、歩いていかねばならなくなる。モスクに集まる人々は、「Eid Mubarak」(おまつりおめでとう)と言いつつ、アラビア語をよく知らない人は、「Eid Mubarak」というカードを衣服にピンでとめてあいさつし合い、お祝いの気持ちを表わす。

この祭りには、子どもたちにお金が配られるのも、エジプトでと同じである。ヴァンクーヴァーでは、大人は友人、知人の子どもたちにそれぞれ3ドルくらいを与える。自分の子どもにはふつう10ドルくらいを与えることになっているが、なかにはYのように、娘に20ドル与えたという者もいる。大人たちも着飾るが、子どもたちには下着からソックスに至るまで新品のものを着せるのがならわしである。

## 2) 礼拝

1日5回の礼拝(サラート)をおこなうことは、カナダ社会では、断食よりもはるかにむずかしいとエジプト人ムスリムたちはいう。しかし、礼拝を全くおこなわないムスリムは、筆者の観察では、As グループを除いては、非常に少なかった。5回のうちのいずれかの礼拝を必ず毎日おこなう者は、ヴァンクーヴァーのインフォーマントの39%、ほとんど毎日おこなうと答えた者は約44%で、計83%の者が、礼拝をなん

らかの頻度でなしている。5回すべてはできなくとも、ズフル(正午)、アスル(午後)、マグレブ(日没)、アシャ(夜)のうち少なくとも2~3回の礼拝はおこなう。ファジル(夜明け)の祈りは、それぞれ寝床のそばでし、礼拝のあともう一度寝るのが普通である。たいていの家庭では、各々の生活のサイクルに合わせて、1人1人個別に礼拝をおこなうことが多いが、ときには、親子が整列して礼拝することもある。たとえば、Na が、ブリティッシュ・コロンビア大学で言語学のMAをとったお祝いに、彼女の家に行ったときのこと、午後5時頃、Na とシム

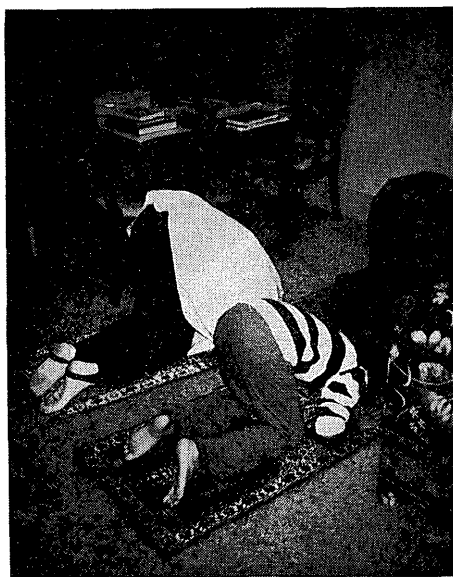


写真12 礼拝するエジプト人少年、少女

シムシミヤをいただきながら話していると、向うの方で、会社副社長の夫F、息子のOm (10才)、娘Mo (12才)が何かやっている。見ると、父Fを中心にして、3人は一列に並んでキブラの方を向き、礼拝をはじめた。アスルの祈りだという。Fの祈りの声が一番大きい。途中で1度あくびをかみ殺していたようだった。習慣としてやっているのであって、必ずしも1回1回非常に宗教的にやっているわけではないように思われる。妻のNaは、いつもではなく、やる気のある時にだけ祈ると言っていた。女性は生理の時の礼拝が禁ぜられていることもあって、母親は、家族の礼拝の列に並ばないことが多い。

共働きの女性エンジニアMは、仕事を終えてからDの家でのパーティにやってきた時、先に来ていた夫や子どもとは別に、1人で地下で祈っていた。子どもたちも、もう祈りをすませた者、まだの者とばらばらで、母親に尋ねられてから祈りはじめた者もいた。彼らは1日5回の礼拝を、休日には必ずするという。Naのように、家族が祈っていても、自分はしないという者もいるが、誰にもとがめられない。

女性エンジニアのDは、1日5回の祈りをおこなっている。夏は朝3時頃起きてフェジルの祈りをしてまた寝る。ズフルは昼食の時、アスルは仕事場でのコーヒープレークの時に合わせて、自分のオフィスのドアをしめて祈る。家に帰ってからすぐ、マグレブの祈りをする。このようにすれば、1日5回の祈りもむずかしくはない、という。Dは3年前から祈りをはじめた。夫のSはいつも礼拝をしていたが、Dに強制はしなかった。しかし、息子が9才になったとき、Sが祈りの仕方を教えようとする時、「ママは祈っていないじゃないか」と反論された。そこでSはDに、「きみも祈るべきだ」と言い、Dもその気になった。彼女は同時にコーランの読誦もはじめた。

Dのように、最近になって礼拝をするようになったという者は、少なくない。エジプトにいた頃はナセル将校団の一員で、宗教的ではなかったM.S.は、最初の結婚に失敗し、その他うまくいかなかったことが重なったため、神の罰だと思うようになり、宗教心をとりもどして礼拝をするようになったという。現在の妻はカナダ人だが、熱心なムスリムで、1日5回礼拝をする。Tの娘で18才のDiは、クウェートで中学を卒業するまで生活し、現在はブリティッシュ・コロンビア大学の医学部に在学している。彼女は、ムスリム社会であるクウェートでは礼拝も断食もしなかったが、ヴァンクーヴァーに来てからは1日5回の礼拝をするし、断食もしているという。

子どもたちは7才ぐらいから礼拝をはじめた。10才になってもやらないときは、体罰(主に平手打ち)を与えて叱る。しかし、筆者の調査では、ムスリムの子どもたちは、自発的に周囲のまねをして祈りはじめることが多い。Mの9才になる娘も、親の



まねをして、最近祈ることをはじめた。

リッチモンドの大モスクでは、日曜日の12時頃、ズフルの祈りに男性がいつも130人あまり集まり、モスクの玄関まであふれ出ているのが見られる。中東諸国の金曜日の礼拝の時と同じ様な光景である。ヴァンクーヴァーでは金曜の礼拝に、仕事のないときや昼休みにはやってくる。アザーン<sup>45)</sup>については、特定のムアッジンはいず、誰もができるようになっている。イスラーム学校では、アザーンの仕方をコーランの時間に教えている。

### 3) 巡礼

巡礼に関しては、「まだ、そこまで考えていない」と答えた2人を除いて、筆者が調査したインフォーマント全員が「できれば行きたい」と答えた。しかし、カナダからメッカまでの距離が地理的にも経済的にも相当なものであること、巡礼にも行きたいが、ふるさとエジプトの親類、友人に会いに帰る方に、より吸引力があることなどから、巡礼は、あとまわしになっているのが実情である。すでに巡礼をおこなった者は3人である。その1人Aは、エジプトにいる老齢の父が、「死ぬまでに1度巡礼をしたいが、1人では足許がこころもとない。できればついて来てほしい。おまえも巡礼はなるべく早くしておいた方がよい」と言ってきたのがきっかけになったという。父親が息子の巡礼費用もうけもった。経済的にもかなり裕福な家族で、巡礼から戻った父親は、「これまで、すべての幸福を享受したと思っていたが、巡礼の時感じた幸福は何物にもかえがたかった」と言ったと、Aは語った。A自身は、カナダに来て以来、ビールを飲むなど、あまり厳格なムスリムではなかったが、巡礼においてムスリムとしての自覚がはっきりとし、巡礼から帰ったあと敬けんなムスリムとして行動するようになった。飲酒はやめ、礼拝も欠かさなくなった。かつてAsグループだったが、Trグループの1人になった事例のひとつである。

他の2人は、カナダに移住したのが、かなり早い時期(1957年)だった夫婦で、エジプトにいた父母たちも死んでしまい、エジプトへ里帰りするよりも、「メッカへの里帰り」を選んだという。

### 4) 喜捨

ヴァンクーヴァーのエジプト人ムスリムがおこなっている喜捨には2種類ある。断食のあと、すべてのムスリムが少額(3ドルくらい)を出すものと、裕福な者が年収の2.5%(ハディースによる)を出すものである。ヴァンクーヴァーのパキスタン・

45) 礼拝の時刻を告げるよびかけ。モスクの尖塔や入口の脇で、肉声でおこなわれる。この役をする者はムアッジンとよばれ、美声の者が選ばれる。

カナダ・センターで集められたザカート（喜捨）は、エチオピアへの救援物資を購入するために用いられていた。モスクでは、受けとった喜捨の領収書を掲示板にはっておき、来た人が税金控除のためにそれをとっていくシステムになっている。

そのほか、巡礼祭にハラール食肉店に連絡して羊を犠牲にし、モスクに集まって来た人に分けあたえることをしたり、断食ができなかったので、代わりにエジプト大使館を通じて、カイロにある福祉事業団に送金するなどして、それをザカートだとする例もある。この福祉事業団は、カナダのオタワにある大使館と連絡をとり、さまざまな福祉事業をおこなっている。たとえば、カイロの失業者たちにエジプトの民族衣装を作らせ、それをカナダで売るといった事業もおこなっている。

#### 5) クリスマスへの対応

クリスマスへの祝いは、カナダ社会において重要な催しであり、エジプト人ムスリムにとっては無視することがむずかしいものである。

ヴァンクーヴァーのエジプト人ムスリムのコミュニティ内部におけるクリスマスへの対応はさまざまで、休日とは認めないという Tr グループから、As グループのように、典型的なカナダのクリスマスに近いお祝いをする者たちまで、幅がある。

自分のアイデンティティがエジプト的伝統よりもイスラームに直結している Tr グループの人々は、クリスマスを全く無視する傾向にある。As と彼女の夫 S.Y. のように、「ムスリムはクリスマスを祝いません」「私たちの宗教には関係ありません」という。その代り、彼らはエジプト本国でと同様マウリドンナビーを祝う。しかし、エジプトでのように、にぎやかに、砂糖菓子を作ったり、人形をならべたてたりすることはしない。Tr グループの者たちにとって、ムハンマドの誕生日は、彼の良きおこないを回想して過ごす日であるという。クリスマスは、イスラームの預言者イエス<sup>46)</sup>の良きおこないを、静かに思いめぐらす日であるべきだと主張する。イエスがクリスマスへの祝日におけるクリスチャンたちの「飲酒と悪いふるまい」を容認しているとは思えない。彼らのクリスマスは、イエスを通して表わされたアッラーのメッセージを不明確なものにし、商業主義にまどわされ、イエスの教えをつまらないものにしてしまうものであると主張する。

Tr グループの家庭では、クリスマスにお祭りをしたり、贈り物の受けわたしをせずとも子どもたちががっかりしないよう、つね日頃から言いかしているという。イ

46) イスラームにおいては、イエスは神の預言者、使徒 (rasul), メシア (masih), 神のしもべ (abd Allah), 神の言葉 (kalima Allah) などと呼ばれて重んじられている。処女生誕や終末の再臨は認められているが、あくまで神の使徒としてであり、キリスト教のような「神の子」という概念は否定されている。

スラムを早くから理解させておけば、子どもたちもなぜムスリムがクリスマスを祝うのが不適切なのか、なぜ贈り物を交換しないのかわかると親たちは断言する。しかし、ヴァンクーヴァーの街並全部がクリスマスのネオンやクリスマス・ツリーで飾られ、クリスマス・キャロルが流れ、カナダ人の友だちが贈り物の話でもちきりになるこの季節は、カナダで生活するムスリムの子どもたちにとって、何がしかの疎外感をもたされる時であることは、子どもたちと話してみるとわかってくる。

Cu グループのエジプト人ムスリムは、クリスマスについて Tr グループほど厳格に考えていない。彼らにとっては、クリスマスは宗教的意義をもつものではなく、家族や友人と過ごす公休日ではない。

D・S 夫妻は、2組のエジプト人ムスリム家族と七面鳥のディナーを催した。M・Y 夫妻、S Z 夫妻も同様のディナーを友人、家族と催した。D・S 夫妻の家には一般のカナダ人の家庭と異なり、クリスマスらしい様子は全くない。リースをドアに飾ったり、居間にクリスマス・ツリーを立ててもいない。贈り物の交換もしない。

一方 M・Y 夫妻の家のように、ドアのまわりにぴかぴか光る電気飾りをはりめぐらせて、一般のカナダ人クリスチャンと同様に一見クリスマス風になっている者もいる。「近所づき合いだ」と割り切っている。子どもたちも、この飾りで多少、安心感をもつという。

Cu グループの親たちも、ムスリムの信仰がキリスト教とどう違うかを子どもたちに説明しているが、贈り物をどうするかについてははっきりしていない。贈り物の交換そのものは、エジプトを含め、アラブ文化の中で、肯定的に考えられるものだからである。D S 夫妻のように、七面鳥のディナーを友人同士で楽しむが、贈り物は一切しないと決めている家族もあるが、M・Y 夫妻は、クリスチャンの友人には贈り物をすることにしている。S Z 夫妻は、クリスマスだからではなく、「1年の終わりを祝うため」に子どもたちに贈り物をする。これによって、子どもたちはクリスチャンの子が楽しみにしている経験を奪われていると感じなくてすむという判断である。

Cu グループの中にも、Na・F 夫妻のように、ムスリムでありながら、北米のクリスマスの習慣をほとんど全部とり入れている例もある。子どもたちが幼い頃には、サンタクロースが来るという話をし、靴下におもちゃやゲームなどの小さい贈り物を入れ、「サンタクロースから」もらったものだと言っていた。子どもたちも大きくなったので (Mo は14才、Om は10才)、今ではムスリムとして「クリスマスは本当は自分たちの祝日ではない」ことを理解している。しかし、子どもたちは今でも贈り物をもっており、キリスト教徒の友人との贈り物のやりとりもしている。Na 夫妻は、

「カナダ社会へのスムーズな同化と、良きムスリムであることは矛盾しない。イエスは、イスラームにおいても、尊敬すべき預言者の1人であり、クリスチャンたちと同様に祝うことは、何らさしつかえない」と言う。Abとそのチェコスロバキア人の妻Hもクリスマス・ツリーを飾り、子どもたちに贈り物をしている。これは子どもたちの、「クリスマスにはムスリムであるよりもクリスチャンでいたい」という気持ちをくんで対応したものだという。Hのチェコスロバキア人の妻も、その娘の夫になったイギリス系カナダ人も、ムスリムに改宗しているが、クリスマスの飾りは、小さい頃からの生活習慣として、ないとさびしい気がするという。H家でのクリスマスには、そういう背景も存在する。Ahのスイス人の妻Doは、子どもたちをムスリムとして育ててはいるが、クリスマス・ツリーを飾り、サンタクロースからの贈り物を与えている。Ahは、息子がクリスマス・キャロルや讃美歌をうたっているのを聞くと、息子にアッラーだけが唯一の神であると念を押すという。

いずれにしろ、Cuグループの人々にとってのクリスマスは主に社交の機会であって、宗教的な意味合いは強くない。彼らは、自らの信仰をそこなうことなくカナダの慣習に従おうとしている。Trグループのように深刻に考えず、きわめて軽くつき合いの一種であるとうけながさうというもので、この日にキリスト教徒のような強い感動や伝統の感覚はもたない。12月の初めに、MがDに電話してクリスマスは何日だったかと尋ねた。Mの姪の新婚の夫が最近カソリックからイスラームに改宗したばかりで、クリスマス・ディナーを期待しているようだからという。Dもクリスマスは何日なのかははっきりしないので、筆者に確認の電話をよこした。このようなことは、一般のカナダ人には、もちろんめったにないことである。

多くのエジプト人ムスリムの親は、子どもたちがイスラームを充分理解しないうちに、クリスマスの楽しさだけにひかれていくことを懸念している。Abのように、子どもたちがクリスチャンの子どもが楽しむ行事をとり逃すのを心配し、他方ではAhのように、子どもたちの希望に合わせたためにキリスト教に強くひかれることを恐れている。

これに対応するため、ヴァンクーヴァーではNFECFSが、子どもパーティーを毎年クリスマスと新年の間に催している。これに出席する人たちは、誰もこの行事を「クリスマス・パーティー」とは呼ばない。これは年末のパーティーとみなされ、交際を深めるための集りという他に意味はないという。1986年には、15組の夫婦と35人の子どもが、ブリティッシュ・コロンビア大学のインターナショナル・ハウスで開催されたパーティーに出席した。ディナーのあと、アラビア語で短い寸劇がおこなわれた。

カラテの実演や、2人の子どもの連弾するピアノ演奏などもあった。最後に子どもたちは、演技をおこなったステージの上にあがり、クレヨンの箱や、おもちゃのネックレスや、プラスチックの絵画用板などの贈り物をもらった。親たちは劇の計画と実行に協力し、贈り物の用意をした。このパーティーをアレンジしたのは、NF ECSの実行委員会である。

たてまえは、クリスマス・パーティーではないが、日取りも子どもたちに贈り物をするのもクリスマスを意識していることがうかがえる。サンタクロースとクリスマスの飾りつけがないだけである。このパーティーは、明らかにクリスチャンの友人のお祝いに参加できない子どもたちに代償を与えるためのものであり、さきに述べた Ah の子どもたちのような状況を防ぐひとつの手段となっている。こうしたパーティーには宗教的ニュアンスはなく、イスラームの信仰に反してもいけないことが、くりかえし強調される。これらは、非イスラーム的環境への対応例のひとつであり、子どもたちが、自分でイスラームの良い点を評価できるようになるまでは、キリスト教をイスラームよりも良いものとみなすのを防ぐための方策となっていると考えられる。

## 2. イスラームへの関心

クリスマスのように、西欧キリスト教的環境の中で暮すエジプト人ムスリムたちが、どうしても直面せざるを得ないものや、ムスリムの義務としてなさねばならない断食、礼拝などに、どう対処しているかについて述べたが、そういった必然的におこってくる問題以外の場では、ヴァンクーヴァーのエジプト人ムスリムが、イスラームとどのように関わっているかについて、言及しておきたい。

### 1) コーラン勉強会

第3章でもふれたが、カナダへ来てからイスラームに疑問をもったり、イスラームをよりよく知りたくくなって、エジプト人同士が何人か集まり、勉強会をひらくようになっていく。

エジプト人だけが個人の家に集まり、コーランの勉強を週に1回、金曜日または土曜日の夜におこなっているのは、ヴァンクーヴァーだけで5カ所になる。しかし、コーランの勉強に関しては、エジプト人だけの集りより、他のムスリムといっしょにする方がよいという風潮がある。トリニダッドバゴ出身の黒人ムスリムOの家で毎月1回ひらかれる勉強会に出席しているエジプト人は、毎回男性だけで20人近くになる。ここには、イラン人、ユーゴスラビア人、トリニダッド人、エジプト人が集まっている。Oは、のちに述べる Rashad Kharifa の信奉者であり、Rashad をかこむ会をひ

らいたこともあった。

コーラン勉強会は、男女別々でなされているのが特徴的で、女性の勉強会はモスクでひらかれているものが最も熱心である。

リッチモンドの大モスクでひらかれているコーラン勉強会をとりしきっているリーダーは西インド諸島出身の女性で、メンバーは、パキスタン人（うち老女2人がレギュラーメンバー、時々若い女性がウルドゥー語に訳してやっている）、フィジー人、エジプト人、モロッコ人、チェコ人（夫がパキスタン人）、ユーゴスラビア人である。年輩の女性が多い。リーダーは黒のヴェール、紺の長服というイスラーム・スタイルで、他のメンバーもヴェール、長服姿が多い。しかし、はでな色づかひの洋服の人もおり、ヴェールのかぶりかたもいろいろで、強制されているわけではない。チェコ人の女性は、ズボン、セーター、ベレー帽や、ときにはミニスカートという純西歐的服装であるが、誰もとがめない。

会の内容は、リーダーが英語でハディースを読み、それについて全員でディスカッションをするというもので、預言者の妻アーイシャの言行や、歴史家タバリーの名なども出てくる。身近な問題もとりあげられる。たとえば、「かつらはいけなひ」とリーダーの女性が言ったことについて、「かつらは、ごまかし (deceit) になるからだ」「髪を染めるのは、ハディースの中でアーイシャが認めている。ただし、ヘンナとカッターン（イエメン産の植物）だけで染めるべきである、老人が白髪を黒く染めるのはいけなひ、若い者はよい」などということが話し合われる。

この勉強会はたいへんオープンで、トランスナショナルなものであった。筆者が初めて訪れたとき、おずおずと入っていくと、ハディースを読んでいたリーダー格の女性は、“Come on, join us”と言っただけで、そのまま中断せずにつけられた。しばらくしてから、隣のパキスタンの女性に、名前と紹介者をきかれたが、どこから来たとも、国籍は何かともきかれなかつた。

## 2) Rashad 事件

アメリカ在住のエジプト出身のムスリムである Rashad Kharifa がコーランについておこなった講演をめぐって、ヴァンクーヴァーのムスリムの間で激しい論争が起きる事件があつた。Rashad とは、アリゾナ州ツーソンのモスクのイマームで、Ph. D. をもち、いくつかの著作のある人物である。彼が1982年に出版した *Quran, Hadith, and Islam* と、*Quran: Visual Presentation of the Miracle* は、ムスリムにとってセンセーショナルな話題の本であつた。ハディース、スンナは信じる必要がない、コーラン

だけが根本だと主張していたもので、多くのムスリムから大反発をうけた。

1984年にエジプト人 M.Kh が中心になって、この Rashad をヴァンクーヴァーによんだ。Rashad は、ヴァンクーヴァーのコミュニティ・センターで講演をおこなった。講演会には、Rashad に対し反対意見を述べるため、サウディアラビアのイマームが来ていたのだが、Rashad の講演が終わる前に、聴衆の間で Rashad に反対する人々が、激しい論争を起して、講演会を中断してしまった。この反対派のうち最も激しかったのはエジプト人で、なかでも As, Cu グループから Tr グループに転向した者たちであった。椅子をもちあげ、投げつけようとするような暴力的な行為もあったため、警察をよぶ騒ぎにまで発展した。

Rashad の主張について、筆者が意見をきいたエジプト人ムスリムの多数は、暴力はまずかったが、Rashad はまちがっていると強い語調で話した。その中には、工学博士の学位をもっている S のように、高度のインテリも多かったが、彼らの意見は、Rashad の説はムハンマドを否定するものであり、最終的には、ムハンマドが啓示をうけたコーランをも否定する方向にむかう危険性があるというものであった。

一方、明確で納得できる説だとして、Rashad にひそかに賛同する人々も、主に Cu グループの中に何人かいた。しかし、こういう意見は少数派であり、筆者が Rashad の本をもっているかどうかと尋ねると、本棚のどこかにあるかもしれないけれども、他の人に言ってほしくない、という答えが返ってきた。

いずれにしろ、Rashad 事件に無関心なエジプト人ムスリムは、As グループの者を除いては、ほとんどいなかった。「これはムスリムを仲間割れさせようという陰謀だ、Rashad は金をもらってこういう本を出版したのだ」と語る者もいた。

### 3) イスラーム関係刊行物

Rashad 事件にもみられるように、ヴァンクーヴァーのエジプト人ムスリムの多くは、イスラーム関係の刊行物に強い関心をもっている。

Cu, Tr グループのムスリムが読んでいる書籍を調べてみると、イスラームをテーマにしたものが、よく読まれていることがわかる。彼らの間で、最もよく読まれている本には、次のようなものがある。

預言者ムハンマドの問題をとりあつかった、Gamal A. Badawi の *Muhammad's Prophethood—An Analytical View—*, The Muslim Students' Association of the U.S. & Canada, 1973 および、*Muhammad in the Bible*, Islamic Information Foundation Canada, 1982。

Muhammad Qutb の, *Islam, The Misunderstood Religion*, Ministry of Auqaf & Islamic Affairs, Kuwait, 1967。

Roulon S. Howells, *An American's 23 Questions on Islam with a Muslim's Answers to them*, An Bureau of Religious Affairs Publication Series No. 53, 1981。

Maryam Jameelah<sup>47)</sup> の *Is Western Civilization Universal?*, Muhammad Yusuf Khan & Sons, Pakistan, 1977, および *The Resurgence of Islam and our Liberation from the Colonial Yoke*, Muhammad Yusuf Khan & Sons, Pakistan, 1980 などである。

これらを読んでいるエジプト人ムスリムは、エジプト本国にいたら、おそらく、こういう本は読んでいなかっただろうという。ムスリムがマジョリティのところでは、イスラームを意識的に勉強することがない。カナダのような異文化環境に来て、むしろ、しっかりしたイスラーム教徒に成長したという。たしかに、エジプトで出会う一般のムスリムたちより、イスラームについて理論武装をした人たちが、ヴァンクーヴァーのエジプト人たちの中に多い。

イスラーム関係の定期刊行物については、*Islamic Horizons*, *The Middle East*, *The Minallet*, *Impact* などがヴァンクーヴァーのエジプト人の中で読まれており、そのうち、*Islamic Horizons* がとくに読まれている [片倉 1988a: 715]。これは北米イスラーム協会が出版している雑誌で、筆者のインフォーマントのうち21人が定期購読しているほか、ヴァンクーヴァーのコミュニティ・センターにもおかれている。エジプトで発行されている *Ahalem* などのアラビア語新聞や雑誌も、ジャックの店で購入することができるほか、エジプト本国に一時帰国したときにもち帰るなどして、読まれている。

ヴァンクーヴァーには、イスラーム関係書籍の専門店が一軒ある。(図1参照)。「頭にかぶりものをしていないことを批判されそうだから」と言って、行きたがらない Cu グループのムスリム女性もいたが、ヴァンクーヴァーのムスリムの中では最もインテリであるエジプト人の出入りが一番多いと、店主のパキスタン人が話していた。

#### 4) riba' — 利子・抵当の問題

イスラームでは、利子をとることは禁止されている。これは、富が一か所にストックされるよりも、たえず循環し、活用されるのが良いというイスラームの考え方による。労せずして得られる利益は、他人を搾取することに通じ、イスラームの基本精神

47) もとは Margaret Marcus というアメリカ名をもつ、ニューヨーク生まれのドイツ系ユダヤ人4世である。ニューヨーク大学卒業後、ムスリムになったという。



に反するものと考えられているのである。

エジプトを含めたイスラーム諸国では、近年、イスラームが再評価されるようになってきたのにもない、損益分担方式などを利用した無利子銀行<sup>48)</sup>の開設が、各地でみられるようになってきている。イスラーム諸国だけでなく、ヨーロッパや、ニューヨークなどにも、無利子銀行が存在している。カナダでも、トロントに cooperative 方式のイスラーム銀行ができています。

ヴァンクーヴァーの BCMA の会合で、この問題がもち出されることも、しばしばある。カナダ社会で、経済的に成功していくためには、利子付きの西欧銀行を利用するのは仕方ないことだという人もいるが、一方、Cu, Tr グループには、イスラームの良心に悩む人も多い。たとえば、家を購入したいが、利子付きの借入金でなければ購入できない事態に直面し、結局購入をあきらめ、賃貸家屋の住居に住むことにした M・Y 夫妻の例もある。M・Y は、2人ともカイロ大学工学部出身のインテリ技術者である。S・M 夫妻のように、親や友人から無利子で借金をしたという例もある。

ヴァンクーヴァーのエジプト人のかなりの人たちは、カナダの普通有利子銀行に預金しているが、利子分は全部ザカートにまわすことによって、この問題を解決しているという人たちも、被調査者のうち11人いた。Tr グループの者たちは、いずれヴァンクーヴァーにも、トロントのように、イスラーム無利子銀行が設立されるべきだと主張しているが、今のところ実現の動きはみられない。

Cu, Tr グループの人々は、カナダの銀行に預金することは最低限にし、できるだけ株式投資にまわしているという。株式投資は、イスラーム経済の考え方にそったものだと考えられているからである。As グループの人々は、イスラームの無利子概念に全く頓着せず、一般のカナダ人と同様な経済生活をしている。「預言者ムハンマドは、高利を禁止したのであって、利子を禁止したのではない」とか、「イスラーム諸国が経済的に立ちおけているのは、こういう問題と関わっているからだ」ともいう。

##### 5) イスラーム化現象

これまでみてきたように、ヴァンクーヴァーのエジプト人ムスリムは、非イスラーム的環境の中で、ムスリムとしての自覚をもち、イスラーム的生活様式を保持しようとしている。その中には、ムスリムがマジョリティのところにいる時より、ムスリムがマイノリティであるカナダに来てから、むしろ、よけいにイスラーム的になったという現象が、かなりみられる。エジプトにいたときには飲酒していたのに、カナダへ来てから飲まなくなった者、かつてはしていなかった断食や礼拝をするようになった

48) 無利子銀行については、[石田 1987: 125-142] 参照。

者などの例は、これまでにとりあげた。それ以外にも、日常的に、さまざまな例がみられる。

エジプト人女医の1人は、カナダに移民入国する時は、西欧的洋服で、ミニスカートに近い服装であったが、最近、長袖、長衣の服装をし、頭からヴェールをかぶるようになったという。エジプト本国に里帰りしたら、カイロ大学やアインシャムス大学の女子学生がみなヴェールをかぶるようになっていたが、自分は彼女たちよりも前からカナダにいて、ヴェールをかぶりはじめたのだという。ふだん、西欧風の服装をしているエジプト人女性は、数の上では多い(As, Cu グループのほとんど全員)が、Tr グループの女性がヴェールをかぶっているのをみて、本当はムスリム女性はみなそうするべきなのだといい、自分がかぶっていないことを恥ずかしく思っている女性たちも、意外に多数である。

男性ムスリムたちは、モダンなアタッシュ・ケースの中に、ビジネス用の書類と共にコーランを入れ、もち歩いている者も多い。私企業の社長Huは、ヴォランティアでマーズーンもやっているため、オフィス用のかばんとマーズーン用のかばんの両方にコーランを入れている。車の中にも小さなコーランをそなえ、人気のある読誦者のコーラン、アザーンやフトゥバ<sup>49)</sup>のカセットをそなえつけ、友人と交換しあっている者もいる。その中には、Cu, Tr グループの者ばかりでなく、ふだんイスラーム的行動をとっていない As グループの者も含まれている。ヴァンクーヴァーのエジプト人

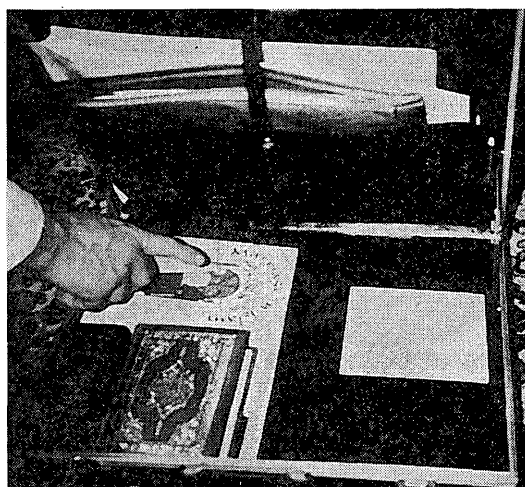


写真13 ビジネス用アタッシュ・ケースの中にもコーランが、常時は入っている

49) 金曜日の午後の集団礼拝や、イードの礼拝に先立っておこなわれる説教。

の間では、最近エジプトで人気のある読誦者のものよりも、1930年代に亡くなったシャイフ・ムハンマド・ラファアイのような、昔のコーラン読誦者の方が人気がある。しかし、エジプトへ里帰りして、最近はやっているコーラン読誦者のものをもち帰ると、話題になり、貸してほしいという申込みが殺到するという。

死後の世界について話題にする者も増えてきている。Tr グループの者だけでなく、神は信じるが、コーランは人間が書いたものと考えているような As グループのエジプト人ムスリムでも、天国と地獄についての話題をひんばんにもち出す。「ムハンマドにとりなしてもらって天国に行きたい。そのためには、断食や礼拝をもっと真面目にせねばー」などと言う。カナダへ移民したエジプト人ムスリムが全体に加齢し、死後の世界への関心をもち出したと考えられる側面もある。しかし、そうした問題について関心をもつのは年輩の者ばかりではない。言語学の修士や工学士の資格をもつ若いインテリ女性が、最後の審判の日について、真剣に話している姿もあった。

顕在する行動様式にはあらわれずとも、潜在的につねにイスラームを気にしているらしい者も、多く見出された。共産圏出身の女性と結婚し、今は断食も礼拝もしていないけれども、死ぬまでにはいつか、「proper なムスリム」になるつもりだ、とつねづね語っている Si は、その一例である。子どもの頃からアザーンをきき、礼拝や断食のおこなわれる中で育ってきたのだから、カナダへ来て、カナダ人になろうとしても、イスラームから簡単に離れられない。週に1回教会へ行くだけであり、年に1度クリスマスの際に商業主義とともに生活化されるだけのキリスト教に比べ、イスラームは、きわめて日常的なものだから、という As グループの者たちもいる。

カナダにはモスクが少ないし、アザーンもきこえてこないし、金曜日にも仕事があるので、エジプトにいた時のようにモスクにはいけなくなったが、神について、もっと考えるようになった。コーラン以外のものにぶつかり、キリスト教の聖書やバハイ、シーア派についても勉強し、イスラームをより意識するようになったという者が多い。

## む す び

調査の成果をまとめてみると、ヴァンクーヴァーのエジプト人ムスリムについて、次のような特徴がみられることが明らかとなった。

### 1. エジプト人ムスリムの3類型

ヴァンクーヴァーにおけるエジプト人ムスリムは、異文化環境への対応の仕方にも

とづき、①As グループ（同化型、西欧主義型）、②Cu グループ（文化主張型、エジプト主義型）③Tr グループ（トランスナショナル型、イスラーム普遍主義型）の3つの類型に分けられる。

As グループは、カナダ社会への同化要求が強く、自分のエジプト的、ムスリムの要素を抹殺しようとする人たちである。エジプト人であるとか、ムスリムであるとかいうアイデンティティをすて「カナダ人化」していく。彼らは、出身国をきかれることさえ好まない。親から命名されたエジプト名、ムスリム名を改名して、英語化したりする<sup>50)</sup>。英仏系のカナダ人との交際を好み、エジプト人同士の交際は濃厚すぎると考えている。ムスリムであっても禁酒せず、イスラームでは禁止されている豚肉やハラール肉などの食物を食べる者もいる。食べない者は、宗教的理由からでなく、「食わずらい」だという。断食や礼拝などのイスラーム的行動をとらず、一般のカナダ人と同様にクリスマスやイースターなどの祝いにも迎合する。利子の禁止などの、イスラームのおきてにも無関心である。こういったエジプト人は、被調査者全体の25%ほどを占める。しかし、からだにしみついてしまっているイスラームを、彼らとて否定はできない。カナダへ来て、カナダ人になろうとしても、イスラームから簡単に離れられない。キリスト教に比べ、イスラームはきわめて日常的な生活体系だからと、彼ら自身が認めている。自らのカナダ人としてのアイデンティティ確立のため、努力するわりには、カナダ人になりきれなかったり、自分はカナダ人のつもりであっても、英仏系カナダ人から、差別されていることを感じる者もいる。そういう不安定感をもつ者の中には、Cu グループをとびこして、いっきょに、Tr グループへ移行してしまう例もみられた。

Cu グループは、エジプト人としてのアイデンティティをもつ人々である。カナダ社会への同化も考慮して生活しつつ、エジプト本国の文化を中心としたアラブの伝統文化を保持しようとするものであった。ヴァンクーヴァーのエジプト人に最も多いのはこのグループで、全体の約45%を占める。大部分がNF ECSのメンバーである。彼らは、自分たちの伝統文化の重要部分としてのイスラームを重視し、カナダ的環境の中で生活しつつ、イスラーム的生活様式を保っている。子どもをヴァンクーヴァーの普通学校にいれ、カナダ社会における子供の将来を配慮する一方、先にみたように、家庭で、あるいは課外特別学校でアラビア語教育をおこない、イスラーム的価値観と行動様式を教えている。アルコール類は一切口にせず、Tr グループほどハラールの解

50) たとえば、ムハンマドはマイク、アッタはオットーとする[片倉 1988a: 709]。改名しないまでも、ムハンマドという名はクリスチャンが嫌うという理由で、ムーという通称を用いている者もいる。

釈に厳格ではないが、なるべく守ろうと努力している。モスクへはあまり行かないが、できる範囲で断食や礼拝をしている。DやMなど小さな子どもたちのいる家庭でもみられたように、子どもたちも積極的に断食や礼拝をおこなっていた。クリスマスには子どもたちがカナダ社会で疎外感をもたないように、贈り物やパーティなどの配慮をする。

Tr グループは、エジプト人やアラブとしてよりも、ムスリムとしてのアイデンティティを重視する人々である。Cu グループとは異なり、イスラームは文化ではなく、国籍や民族をこえるトランスナショナルなイデオロギーであると考えられる。表面的には、As グループと同様に、各々の出身国を否定する<sup>51)</sup>。エジプト人同士ばかりでなく、モスクを中心としたムスリム同士のつき合いを大切にし、コーラン勉強会を、活発にひらいている。子どもにカナダのキリスト教的教育を受けさせることを好ましくないとし、リッチモンド大モスク附属のイスラーム全日制学校へ行かせる者が多い。Cu グループと同様にアラビア語教育に熱心であるが、日常アラビア語よりもコーランのアラビア語を教えるべきだと主張する。礼拝や断食、禁酒、ハラール肉、利子の禁止などを厳格に守っている。もちろんクリスマスなどのキリスト教の祝いはしない。Rashad 事件でみられたように、信仰に関わりのある事件には敏感で、イスラーム関係の出版物をよく読んでいる。Tr グループは、全体の約30%を占めている。

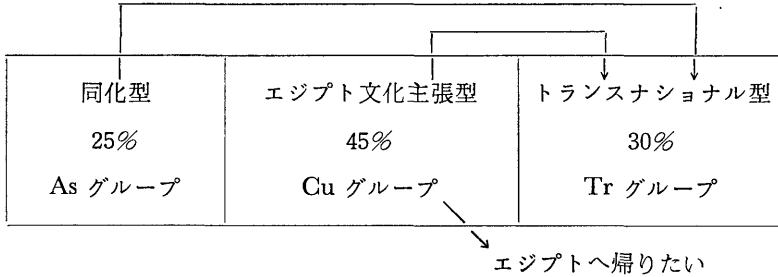
Tr グループのエジプト人ムスリムの中には、かつて As グループに属していたが、アイデンティティ・クライシスにおちいり、ある日突然のように Tr グループに移行して、熱心なムスリムになった者、本国の父と共に巡礼に行ったことをきっかけに Tr グループに移行した者も含まれている。

第3章でみたように、Cu グループの中には、エジプトへの帰国を望む者が多く、実際に帰国した者もいる。Tr グループの者は、カナダ社会において、ムスリムとして生きていくことの困難に悩みながらも、地球上どこでも良きムスリムとして生きていけるというトランスナショナルな考え方をもっており、ムスリムがマジョリティを占めるエジプトに戻った者はいない。彼らは、たびたび里帰りしたりすることで不満を解消している。

3 グループの人口構成およびその移動の傾向を図にすると、下記ようになる。As, Cu グループから転向する者がいること、イスラーム化現象が広まりつつあること、Tr グループの者は、エジプトへも戻らないし、転向もしないことから、増加の傾向

51) 「どちらの国からこられましたか」ときくと「そんなことはどうでもよいことです。みな同じムスリムなのですよ」という返答がかえってくる [片倉 1988a: 710-711]。

にある。As, Cu グループから Tr グループに移行した者は、Rashad 事件にみたように過激派ムスリム、原理主義者になる傾向が強い。



この3グループは、まったく個別に存在しているわけではなく、日常生活にしみこんでいるエジプト的、アラブ的、イスラーム的な価値観 [片倉 1985: 203-217, 1988b: 127-147] や、それにもとづく行動様式に集約される共通点をもっている。

伝統的アラブの作る集団の多くと同様、ヴァンクーヴァーにおけるエジプト人ムスリムのコミュニティも開放的であり、排他的でないことが観察された。第1章にみたように、NFECS には、エジプト人でない者はもちろん、アラブムスリムでない者も、同じように顔を出し、筆者のような日本人も、すんなりと会員にしてくれるような雰囲気があった。コーラン勉強会のような、小さな集りにおいても同様であった。

第3章で述べたように、エジプト人同士の交際が最もさかんであり、ひんばんな訪問、家族単位のつき合い、「ジャーラ」のように、エジプト本国でみられるのと同様な習慣がカナダにおいても続いている。困っている者や、弱者に対する配慮も、カナダ社会一般になされているよりもはるかに強い。本国の親族との結びつきが強いことも、共通の特徴としてあげられる。

エジプト特有の食物や飲物への好みも、共通しているもののひとつである。共働きの忙しい家庭も含めて、どの家庭でも、伝統的なエジプトの食事を、一家でかこむ風景がみられる。食事はなるべく家中がそろって食べるというアラブの習慣も、そのまま存続している。若い世代も、両親とそろって食べるエジプト料理に、西欧的食物に対してと同様の愛着と嗜好をもっている。ヴァンクーヴァーのイスラーム食料品店には中東から直輸入される冷凍食品や乾燥食品を含め、エジプト食が全部そろっている。

このような文化的共通性の点から観察すると、As, Cu, Tr グループは、同じ民族集団に属するといえるだろう。しかし、すでにみてきたように、イスラームを軸とする彼らのカナダ社会への対応の仕方には、大きな相違点が観察されたのである。

## 2. イスラーム的生活様式の強化

イスラーム教徒が多数を占め、ムスリムであることはむしろ当然であるエジプトから、地理的にも文化的にも、最も遠いといえるカナダに移民してきたエジプト人たちは、イスラームから解放されようとしてやって来たのではない、そうではなくとも、結果的にはイスラームから離れてしまい、カナダ的西欧社会の中に組みこまれてしまうのではないかと、予想された。しかし、本稿で明らかになったように、むしろ逆の現象がみられたのである。すなわち、イスラーム的生活様式が強化され、全般にイスラーム化現象が起こっているのである。第5章で詳細にみたように、カナダへ来てから禁酒をはじめた者たち、礼拝や断食をするようになった人々、ヴェールをかぶるようになった女性、礼拝を1日5回するようになったインテリ男女たちなどの例がある。Asグループの者たちの中にさえ、今はまだイスラーム的行動をとっていないけれども、潜在的にはイスラームをつねに気にしている者も見うけられた。

こういった現象には、いくつかの理由が考えられる。ひとつは、異文化環境の中で、自己同定への希求が強まることがあげられる。エジプト本国では、エジプト人であることや、ムスリムであるという、とくに強い自覚はもっていなかったが、自分は西欧人とは異なっているのだという意識をはっきりもつようになった者が多い。ムスリムやアラブへの差別や偏見が未だに残るカナダ人社会の中で、疎外されていると感ずることから、イスラームへの傾斜を強くする現象もみられる。

イスラーム信仰の内面化、個人化の問題という要因も考えられる。「集団イスラーム」から「個人イスラーム」[片倉 1988a: 684-685]への移行、あるいは、「個人イスラーム」の顕在化ということである。エジプトでは、ムスリムはマジョリティであり、集団の一員としてのムスリムであったのが、カナダ的異文化環境の中では、個人ムスリムとしての様相が強くなっていく。神と自分との対峙という面がより強まるのである。本文中でみたように、Asグループのムスリムが飲酒していても、まわりにいるカナダ人はもちろん、他のエジプト人ムスリムから批判されることもない。家族の中でも、それぞれの生活にあわせて、個別的に礼拝をするケースが多い。エジプト本国時代、モスクに行き集団の中で礼拝している時にはむしろ意識しなかったイスラームについて、意識するようになったといわれる。エジプトでは、まず集団の一員としてムスリムであったのに対し、カナダでは、まずその個人がどれだけムスリムであるかが問題になる。個人の内面にあるイスラームが顕在化し、コーラン勉強会にみられたような個人的、自発的なイスラームへの接近がなされるようになっていく。

ヴァンクーヴァーにおけるエジプト人のイスラーム化現象について、「年のせいだ」と説明するエジプト人ムスリムもいる。働きざかりに移民してから、異国の地で加齢するにつれて、精神的なよりどころをイスラームに求める傾向が強くなることは、確かに認められる。死後の世界のことに興味をもち、そろそろ天国へいく準備をしておかねばと考える年齢層が増えて来ているという事実もある。しかし、カナダ育ちの若い世代の者たちの間にも、イスラームへの強い傾斜がみられるのは、第4章、第5章でみた通りである。

この現象は、近年、地球上の各地でみられる、非イスラーム圏のイスラーム化現象のひとつの事例としてみることもできる。イギリスやアメリカの都市に多数のモスクがたてられ、デンマークやオーストリアなどでもムスリムへの改宗が増えている。イスラームが西欧でも第2の宗教となりつつある。カナダも、例外ではない。本稿第2章でみたように、大ヴァンクーヴァーだけでも合計5つのモスクが建設され、その他のイスラーム的施設も整備されつつある。西欧文明のいきづまりが自覚されるなかで、イスラームのもつトランスナショナリズム、都市性、科学的合理性などの性格が、見なおされてきているといえよう。

世界史上、最も早く都市化が進んだ地域で生まれたのがイスラームであり、イスラームが、都市の宗教であることは、今や定説になっている。「イスラーム世界」は、ムスリムと同義語ではなく、そこにはユダヤ教徒、キリスト教徒、仏教徒をはじめ、さまざまな人たちを含み、それらの人々と共存していくシステムこそがイスラームだとされる。考え方を異にするもの同士が各々の考え方をそのまま保持しつつ、しかも互いに共存していく関係は、カナダ有数の都市であるヴァンクーヴァーに居住するエジプト人ムスリムたちの間にも見うけられることは、本稿でみた通りである。

イスラームの科学的合理性についての見解も、広まりつつある。本稿でみたようにキリスト教徒からムスリムに改宗した人たちの多くは、「神の子イエス」「三位一体」「処女懐胎」についての懐疑をもっていたという。イエスを預言者としては認めるが、これらを否定するイスラームは、キリスト教よりも合理的で理解しやすいと考える人が増えてきている。カナダでは、トロント大学の教授ムーア博士 (Dr. Moore) が、胎児の成長段階についてのコーランの記述が、1940年以降、とくにこの15年間の科学的研究成果とほぼ一致するという研究を発表している。ムーア博士は、この記述が「長らく存在してきた科学と宗教の間の溝をせばめるもの」と述べている。この研究については、*Islamic Horizons* で大きくとりあげられた [*Islamic Horizons* 1985: 1]ばかりでなく、カナダの一般新聞にも掲載されていた [*Tront Globe and Mail*



*Newspaper* 1985: 3]。イスラームのもつこうした科学的合理性は、工学士や理学士などの学位をもつインテリエジプト人に熱心なイスラーム教徒が多い理由のひとつであろう。

カナダでは、1960年代に、トルドー内閣が多文化主義 (multi-culturalism) 政策をうちだした<sup>52)</sup>。ブリティッシュ・コロンビア州では、多文化主義に関する協会 (Vancouver Multi-Cultural Society of British Columbia) が設立され、多文化主義の趣旨をひろめていこうとする活動をおこなっている。多文化主義政策によって、カナダ人の国としてのまとまりへの志向よりも、個々の移民集団のもちこむ文化がそれぞれに拡張するという結果も出て来ている。

ヴァンクーヴァーのエジプト人の間で、イスラーム的生活様式の強化の傾向がみられることには、こういったさまざまな外的情勢が、イスラームの内面的要素とからみ合って出て来ていると考えられる。

本稿の調査の対象となったエジプト人ムスリムは、数の上では少数であり、量的に結論づけることはできないけれども、異文化環境におかれたムスリムの質的な様相は把握することができたと考えている。

筆者はすでに、カナダのアラブムスリムが、今後アラブ民族集団の一員としてよりムスリム集団の一員として自己同定していく可能性について指摘した [片倉 1988a: 724]。ヴァンクーヴァーのエジプト人ムスリムにも、その傾向があることは、As, Cu グループから Tr グループへ移行する者が増加していること、全体的にイスラーム化の現象がみられることから明白である。

カナダ社会で、日常語としてのアラビア語は喪失していながら、イスラームがくだされた神の言葉としてのアラビア語を「価値言語」として認める若年層の者たちが、英語や仏語でイスラームを語り、カナダ社会での集会で、イスラームに関する演説もするようになってきている。ヴァンクーヴァーのアラビア語学校でも、これまで非ムスリムをも対象にしたテキストを使用していたのが、最近ではコーランなど、イスラームのアラビア語を教えるようになってきている。こうした状況の中で、カナダ生まれの2世、3世のエジプト人ムスリムが、どのような方向に進んでいくか、今後の動向を注目していく必要があると考える。

52) 具体的には、民族史の著述への補助金や民族研究講座の設立、英仏以外の言語による新聞やテレビ・ラジオ局の認可および援助などをおこなうほか、公共機関へのエスニック・マイノリティの雇用を促進しようとする政策である。

## 文 献

ABU-LABAN, Baha

- 1980 *An Olive Branch on the Family Tree; The Arabs in Canada.* McClelland & Stewart and Canadian Government.

BADAWI, Gamal A.

- 1973 *Muhammad's Prophethood—An Analytical View—.* The Muslim Student's Association of the U.S. & Canada.  
1982 *Muhammad in the Bible.* Canada: Islamic Information Foundation.

HOWELLS, Roulon S.

- 1981 *An American's 23 Questions on Islam with a Muslim's Answers to them.* A. Bureau of Religious Affairs Publication Series No. 53.

ISLAMIG HORIZONS

- 1985 Canadian Scholar Confirms Qur'an and Ahadith on Human Embryology. *Islamic Horizons* 14(1): 3, Islamic Society of North America.

JAMEELAH, Maryam

- 1977 *Is Western Civilization Universal?* Pakistan: Muhammad Yusuf Khan & Sons, Khan & Sons.  
1980 *The Resurgence of Islam and our Liberation from the Colonial Yoke.* Pakistan: Muhammad Yusuf Khan & Sons.

石田 進

- 1987 「イスラームの無利子金融の理論と実際」 片倉もとこ編『人々のイスラーム——その学際的研究』日本放送出版協会, pp. 125-142。

片倉もとこ

- 1985 「アラブとは何か」『文化人類学2 民族とエスニシティ』アカデミア出版, pp. 203-217。  
1986 「“カナダのムスリム”素描 ——民族原理と文化淘汰を考えながら——」『季刊人類学』17(3): 206-215。  
1988a 「異文化環境におけるムスリム ——カナダにおけるアラブムスリム社会の形成——」『国立民族学博物館研究報告』12(3): 681-726。  
1988b 「民族原理に関する理論」『民族とは何か』岩波書店, pp. 127-147。

大塚和夫

- 1985 「下エジプトのムスリムにおける結婚の成立過程 ——カリュービーヤ県・ベンハー市とその周辺農村の事例を中心に——」『国立民族学博物館研究報告』10(2): 273-307。

QUTB, Muhammad

- 1967 *Islam, The Misunderstood Religion.* Kuwait: Ministry of Auqaf & Islamic Affairs.

RASHAD KHARIFA

- 1982a *Quran, Hadith, and Islam.* Tucson, U.S.A.: Islamic Productions.  
1982b *Quran: Visual Presentation of the Miracle.* Tucson, U.S.A.: Islamic Productions.

SARWAR, Ghulam

- 1984 *The Children's Book of Salah.* London: The Muslim Educational Trust.

WASSEF, N. H.

- 1977 *The Egyptians in Montreal: A New Colour in the Canadian Ethnic Mosaic.* Faculty of Graduate Study and Research, Quebec: McGill University.

*Tront Globe and Mail Newspaper*

1984年6月—1984年9月および1985年6月—1986年2月。

*The Vancouver Sun Newspaper*

1984年6月—1984年9月および1985年6月—1986年2月。